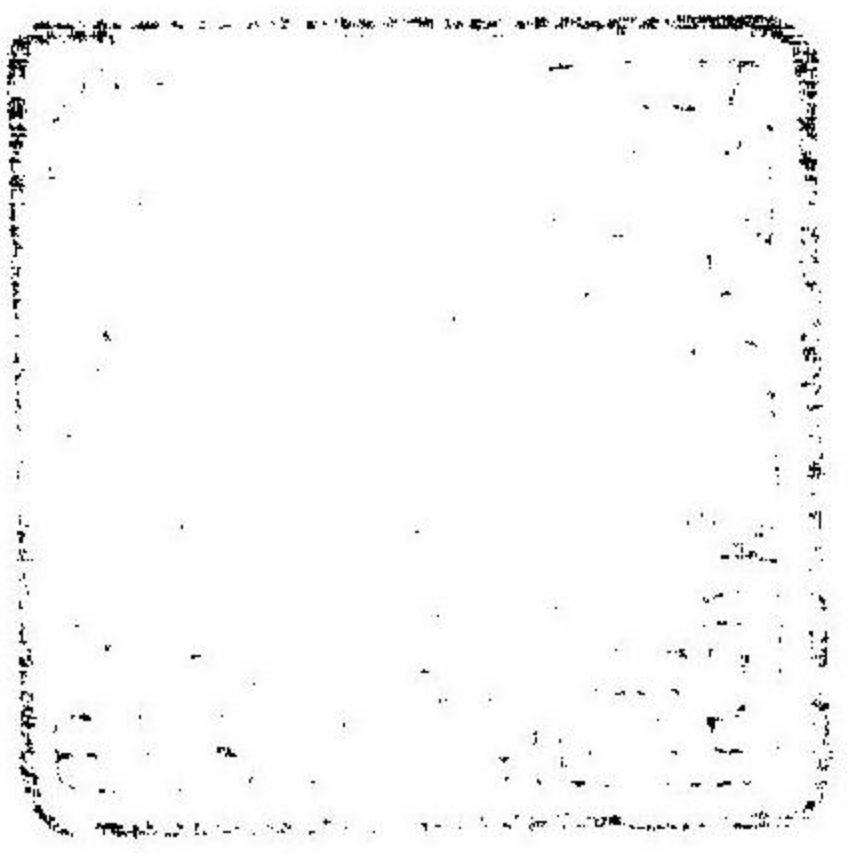


815 ~~H378~~
H384 n



261055

開發新式 日本文典發刊の主旨

目下日本文典の書これかれ世よ見えてはあれどその格法秩序さらよ一定の規律あきごとく錯亂混同一つたに見るに足るものあり いまた曾て開發的教授法にかゝる無く修學するに一讀理想的に會得徹底せしむるの良書世にあるを見ず ために學生これが講習にくるとみ實地應用の學力に至る尠きはけたと本科教授にその法立たずその術無きに坐せるのみ 本會茲に見るあり 國文語學院の語法文則教授書の原稿中その秘訣要領を提書しもつて通學に暇なき諸士もしくは遠隔地方をたしく聽講するあたはざる者のために刊行するところあり

そもく本編開發新式の日本文典脱稿の功を奏せるや一朝の企圖に出でとれあらず おのれ積年の苦學實にこの一科にあり ために榮辱を捨て寢食を忘れたる既に年久し 編中先哲語學家の曾ていはざりと濫與學理を啓發し一新創唱にかゝるところ蓋と尠しとせず こと本編世にありふれたる語學書の比と同一視せざらんことを 他の文典講義録の例と蔑視せざらんことを

日本文典發刊の旨趣

凡例

一 本編はつとめて初學生をして日本文典を一讀理解的に會得し易く記憶し易からしめんことを目的とす。されば從來在り觸れたる不規律錯亂的の舊式を廢し推理開發的の新式を立て、組織せり。ゆゑに在來語學書とその趣を異ふし而目を一新せるをち／＼けだし抄しこせず。

一 意義の高遠精微よわたれるはすべて圖畫をもてさし示しその格法部門の類別は一々系統を表明してそれが條理を判定するより便ならしめたり。

一 詞の性質効用より名目を改稱しあるは新たし名を命ぜしところ尠からず。名は實の質なり。その性質効用より適切せるよりあらずは記憶せしめんも會得せしめんも開發的の教授法より反し學生講習の不便尠からねば止むを得ざるなり。

一 創明啓發之際かるをち／＼は例證をものすべけれど本文中古き歌文どもを引かんことは初學生を導く教科書類よりは却て煩冗し失し益尠し。ゆゑに例證のときは重もに附録に別記し十分に確證を盡して論をきはめんとす。その理由はたゞ證證をたしかむるまでよ過ぎざるのみにて初學を教ふるためには日用平易の例語をもてさす方近みちなればなり。

豫告

一 日本文典完結の後に至り試験を志願する者は受験料金三十錢を添へ問題の送付を乞ふべし。

一 試験に及第したる者は卒業證書を授與す。

新開式 日本文典

林 夔 臣 講述

緒論

日本文典はすかはら語法文則を講究する一大學科とす

いはゆる國語學これなり

本科はこれを學びこれを教ふるに開發的教授法に據り理想的に講究するにあらすはたやすく會得徹底しがたきものとする。よつて本編は原義を詳かにするを先にし理論を究むるを主とするにあり

そも／＼人の言語は腦裡に鑒識する限り事物の眞影實況を口音に寫眞し人事百般に應用するものかれはその法則

日本文典は推理開發的に學ぶべし。不規律錯亂的に學ぶべからず。もしこれが方針にそむけば學力進歩の遲速他の學科よりも殊に損益のいちじるを同より論をよめざるなり。よつてこの欄内には他の各種文典を列記し本編日本文典とあひ比較しもつて學生讀者をしてその部門類別を對照せるに便りし一日瞭々便否優劣を理會し易からしむ。

○落合直文氏は中等日本文典に編を

緒論

凡例

一 本編はつとめて初學生をして日本文典を一讀理解的に會得し易く記憶し易からしめんことを目的とす。されば従來在り續れたる不規律錯亂的の舊式を廢し推理開發的の新式を立て、組織せり。ゆゑに在來語學書とその趣を異ふし而目を一新せるをちくけたりしとせしむ。

一 意義の精選精微とわたれるはすべて國語をもてさし示しその格法部門の類別は一々系統と表明してその條理を判定するに便ならしめたり。

一 語の性質効用より名目を改稱しあるは新たに名を命ぜしところ夥ならず。名は實の實なり。その性質効用と適切せるよあらずは記憶せしめんよも會得せしめんよも開發的の教授法と反し學生講習の不便夥からねば止むを得ざるなり。

一 訓明啓發と係かるをちくけは例證をもつべけれど本文中古き歌文どもを引かんことは初學生を導く教科書類とは却て煩冗と失し益少し。ゆゑに例證のときは重もに附録に別記し十分に確證を盡して論をきはめんとす。その理由はたゞ證をたしかむるまでと過ござるのみにて初學を教ふるためには日用近易の例證をもてさす方近みちなればなり。

像 告

一 日本文典完結の後に至り試験を志願する者は受験料金三十錢を添へ問題の送付を乞ふべし。

一 試験に及第したる者へは卒業證書を授與す。

新開 日本文典

林 堯 臣 講述

緒論

日本文典はすかばち語法文則を講究する一大學科とす
いはゆる國語學これなり

本科はこれを學びこれを教ふるに開發的教授法に據り理想的に講究するにあらずはたやすく會得徹底とがたきものとする。よつて本編は原義を詳かにするを先にし理論を究むるを主とするにあり

そもく人の言語は腦裡に鑒識する限り事物の眞影實況を口音に寫眞し人事百般に應用するものかれはその法則

日本文典は推理開發的に學ぶべし。不規律錯亂的に學ぶべからず。もしこれが方針にそむかば學力進歩の遲速他の學科よりも殊と損益のいちじるを固より論をまたざるなり。よつてこの編内には他の各種文典を列記し本編日本文典とあひ比較しよつて學生讀者をしてその部門類別を對照するに便りし一日暇々便否優劣を理會し易からしむ。

○ 落合直文氏は中等日本文典に編む

緒論

聲音及文字

言語

文章

と大別せり。こは不規律の立てざるなり。何となくは音韻は詞と「てにをは」を結び合せて思考を完全に言ひあらはすに足るべき組立の上を謂ふ名稱なり。そは口も言ふと筆して書くとの別こそあれ。法則の上よかいては何の差異ある。文法の何たるを知らざるひがこと、謂ふべし。

○大和田建樹氏は和

字典

語格

章格

と大別せり

○物集高見氏は初學日本文典を綱を

またがつて天性自然の原則に則とらざるを得ざるものとす。ゆゑに宇宙間に有りと在る事物變化の妙用に徴してこれが法則を發揮しこれが成立を辨明するにあらずは決して完全なる語法文則と稱すべからざるあり。さて日本文典全體を成立上よりこれが大綱を大別して

音聲論(詞の連聲法)

詞辭論(詞の成立法)

文章論(詞の結合法)

の三部に部門を立てかねて本科講習の針路を豫定せしむ。音聲論とは言語を組織するに一音一義の上に就きて連聲調語の法則を論ずるの範圍に屬する限りをいふ。ゆゑに詞の連聲法とも稱す。

文字論

言語論

と大別せり

○那珂通世氏は普通

教育を綱を

文字論

言詞論

と大別せり

○中根淑氏は日本文

典を綱を

文字論

言語論

文章論

音調論

と大別せり

いづれも大同小異すべて秩序を得たるものとも思はれず中に於いて文字論を大綱中に掲げなしたるはいかにぞや。こは音聲論の細別に置きて論ずべきもので何となくは文字はたゞ音

たゞと音聲論のごときは詞辭論を學ぶ傍に兼修するを便利とす。その理由何となれば動詞假名格濁呼音便通音格のごときは名詞動詞の格法をほゞ會得せる上からでは學ぶよ不便を感じるのみならずそれとあひ須ちそれと關係する條目はその都度あひ合はせて兼ね學びあひ對照する都合あればかり。ゆゑに本編の附録として別記にこれを論述せり。

詞辭論とはたゞ一詞一辭の上につきてその成立および性質と効用との格法類別を論ずるの範圍に屬する限りをいふ。ゆゑに詞の成立法とも稱す。

たゞと詞辭論は文章組立法に歩を進むるの階梯として文章論に先立ちて學ぶを順序とす。ゆゑに先づ前編に

辭の符號に過ぎぬものなり 語法文則を講ずる書 本は音聲をこそ主として論ずべけれ

○關根正直氏は國語學上綱を

音格 言格 句格

と大別せり 此は大和田建樹氏が唱へるさまに類し筋立たず 大綱の部別に何格と稱せしむるは何とぞや 法と論とをいひてありし 何とぞは格は法中の資格品質を辨別するに用ひ稱して物の地位(すなはちその法(すなはち)をいふ法は事なすの法(すなはち)をいふ法なればなり また句格といふは句は章中の一大部分のものなり 詞の結合法すな

おいてこれを論述せり すなはちこれを前期六ヶ月の課程と定む

文章論とは靈辭をその語尾に配置し詞と詞とをあひ連絡しあひ關係せしめてもつて人の思考を完全に言ひ寫し書き表はすに足るべき詞の結合法を論ずるの範圍に屬する限りをいふ ゆゑに詞の結合法とも稱す

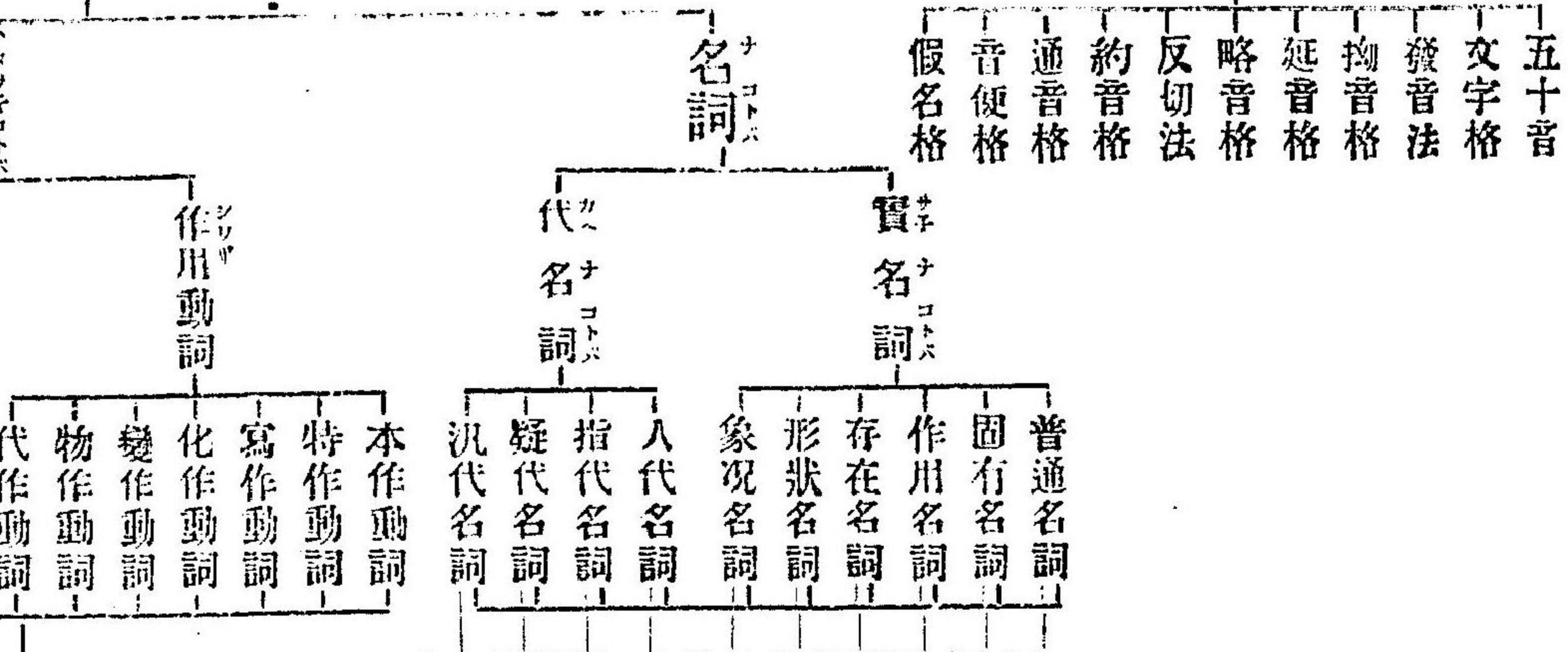
たゞし文章論はすでに修めたる詞辭論の格法類別に準則とそが力に據り後歩を進めて學ぶを順序とす ゆゑに次に後編においてこれを論述せり すなはちこれを後期六ヶ月の課程と定む

かほ日本文典全體の綱領およびその連絡せる關係類別の概畧を系線に表明しもつて本科講習の順序方法の針路を

はち文章組立の方法を論ずべき文典中大括りの大綱に句格といへるはいかなる考へにか 更に解説す

豫想せしめ簡より繁に易きより難きに入るの目途をぼ々窺ひ知らしむ 音聲詞辭文章の三區別を明確に辨知しもつてこれが定則をあやまるなく またその系統の秩序を錯亂混同するがごとき不規律の學びかたをかきを要す

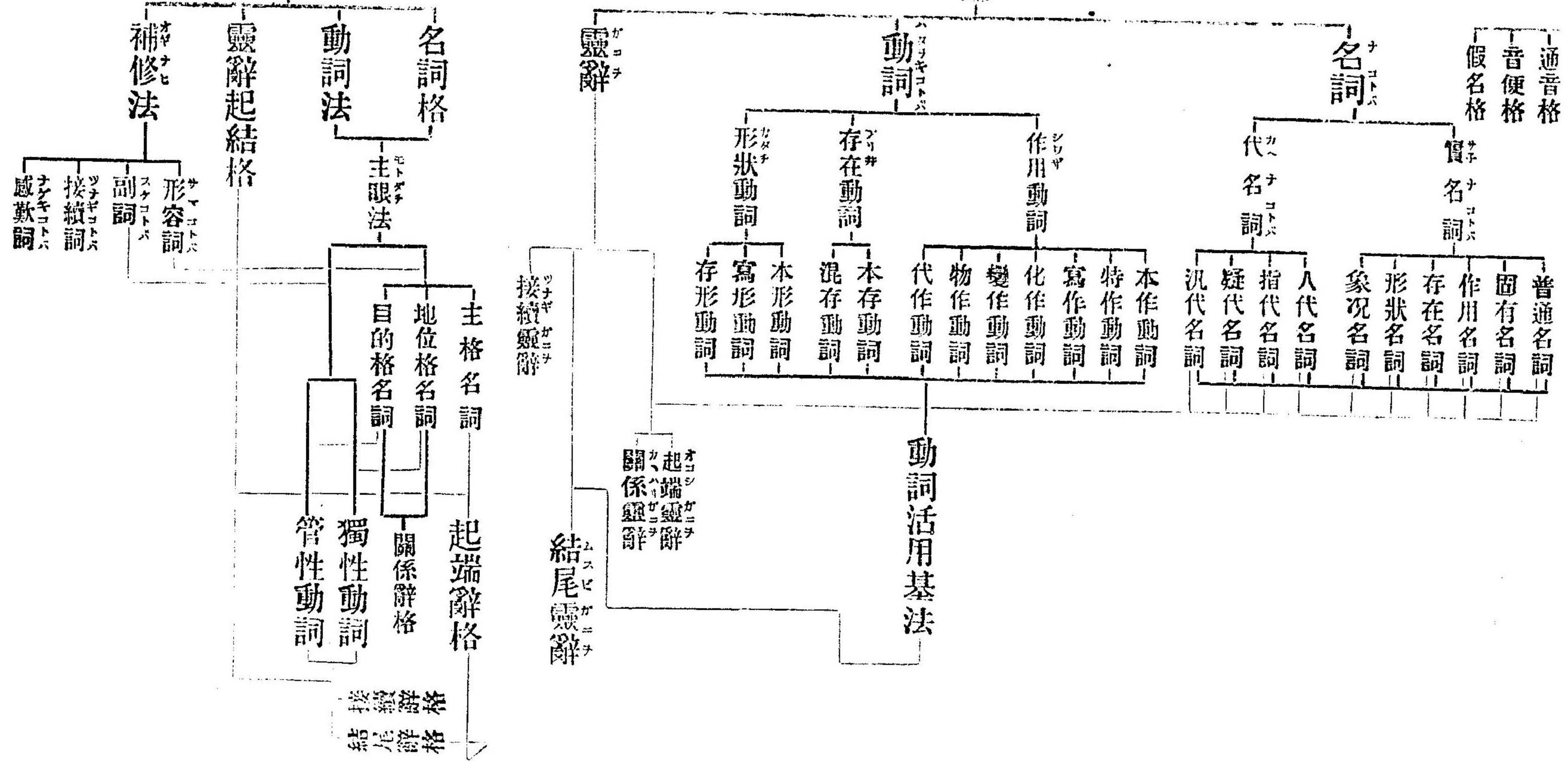
日本文典 詞辭論



動詞活用基法

日本文典 詞辭論

文章論



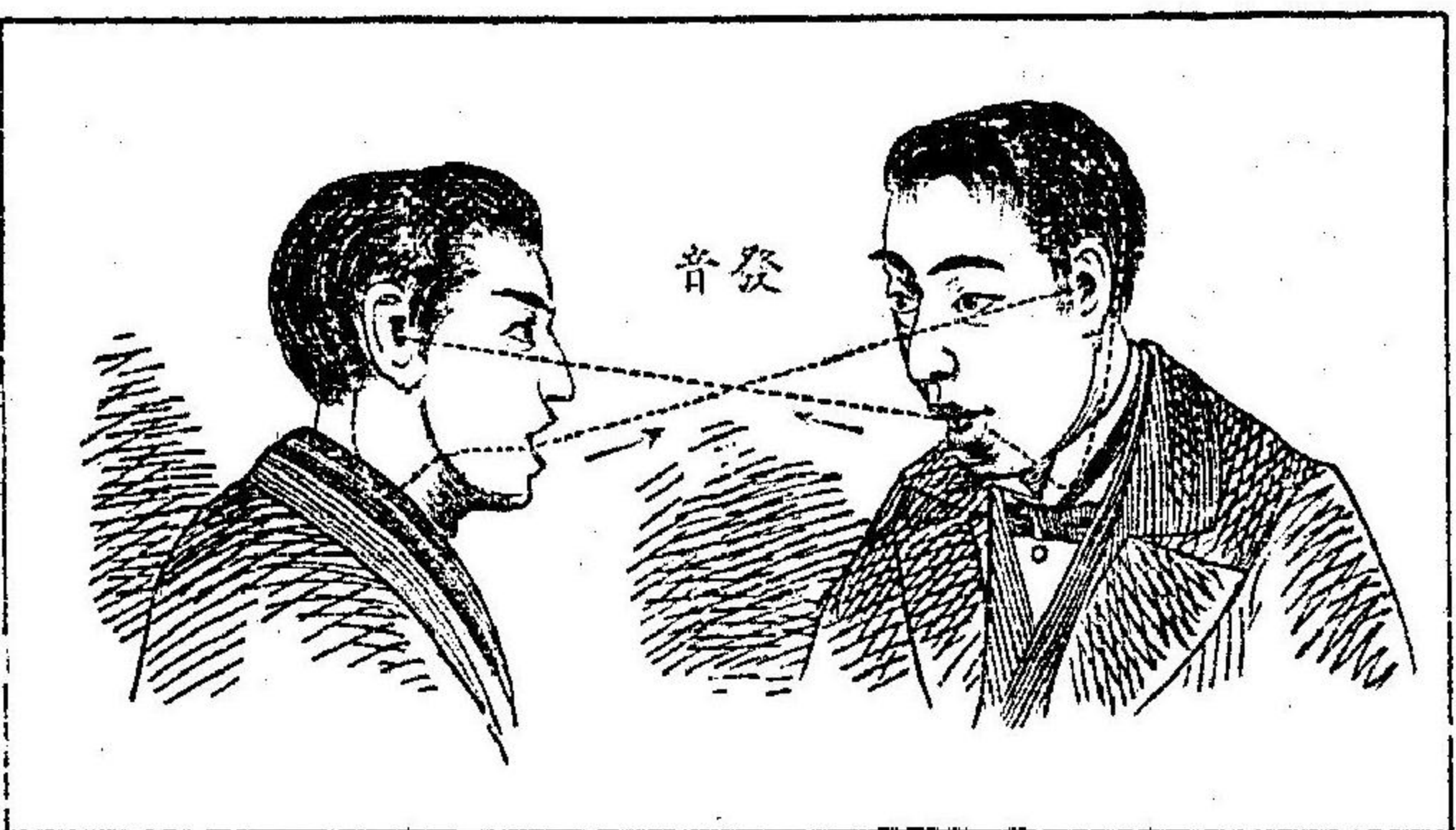
前章においてすでに本科全体の綱領部門の概畧を豫定し
これが講習の順序方法の針路をさし示せり。よつてそれ
が方針に則とり順次章を逐ひて簡明に説き示さん

詞辭論

第一章 言語の成立および性質

言語は人その思想を腦の感覺に起因しこれを聲音に發し
これを口に出るに成り立つものとす。まかしてその効
用はこれを自身の口より他人の耳にあひ達しもつてその
情意をたがひにあひ交通するにあり。けだし人類社會一
大至重の要具なり。千言萬語をさすもたゞ僅かよ五十音
の變化に基づく離合聚散の妙用に成り立つものを知るべ
し。すなはち左の圖のごとし

情意ヲ
交通ス
ルニ言
語ヲ以
テスル
ノ理ヲ
示ス圖



夫かして信を萬里の外にあひ通じ事を千歳の後に傳へん

にはこれを筆に寫して紙上に記すべし すなはち文章これなり あるいは折りに觸れ情ものに感じて吟詠するあり 歌すきはちこれあり

ゆゑに言語文章は人事百般の眞影實況を口に言ひ寫し筆に書き表はともつて人類社會交通の上にこれを應用するにあり さればその法則の據るところ天性自然の眞理原則に基づかざるを得ざるものとす これに由りてこれを推すに有機體無機體を問はず有形無形を論ぜず物として體を具へざるはあし 夫かして體を具へたる限りは用を具へざるを得ざるものとす 夫かしてその體あり用ある上はかからずその用を起因せしむべき因すきはち主宰者なきを得ざるものとす これ自然の天則にして百事萬物

すべてをからざるはなし

さて言語文章の成立の順序を

詞の連聲法詞の成立法詞の結合法の三部に部門を別かて

るうち詞の成立法中詞性を天性自然の眞理原則に基づき

これを類別せば

名詞(體言)

動詞(用言)

靈辭(てれをは)

の三類とあさざるを得ざるあり

今これを人身動作瀛車運轉の上り譬ふ

るに左の圖よまめせるごとく人身ならばその胴體はすか

へち名詞に比し四肢の動作はすなはち動詞に比し頭腦の

○落台直文氏は中等
日本文典より

體言

用言

助辭

と類別せり 然るにその
細目に至り體言をば

名詞

代名詞

副詞

接續詞

歎詞

と類別し用言をば
作用言

形状言

と類別せり 不規律きは
まれりと謂ふべし 是は
もとを体言といひながら
それが細別に至りて名詞代
名詞とやうに言と詞とに
異稱し然るかと思へば用
言の細別には作用言形状
言とやうに言と詞とに異
稱せず いさみたりと謂
ふべし
そはとまれかくまれ若も
國語の法規を論ずるの文
典なれば「たいげんよう
げん」とやうに字音に稱
へずして「な」とばはた
ちとことば「とやうに國
ことばに稱へたきものな
り 然るときは「名詞動
詞」とやうに熟字をあつ
るを穩當とすべし
また「てれをは」はその性
質と効用とに據りて適當
の名を求めば「がたを」と
稱ふべし 其の理由はが

感覺はすかはち靈辭に比すべし

詞辭ノ
三大別
チ人身
ノ動作
ニ比シ
テ其ノ
原則ヲ
示ス圖



また瀛車ならば車床車軸は名詞に車輪の運轉は動詞に蒸
汽機關の妙用は靈辭に比すべきなり かほこれを時計の
時を報するよ譬ふるも鳥の飛ぶにたとふるも魚の泳ぐに

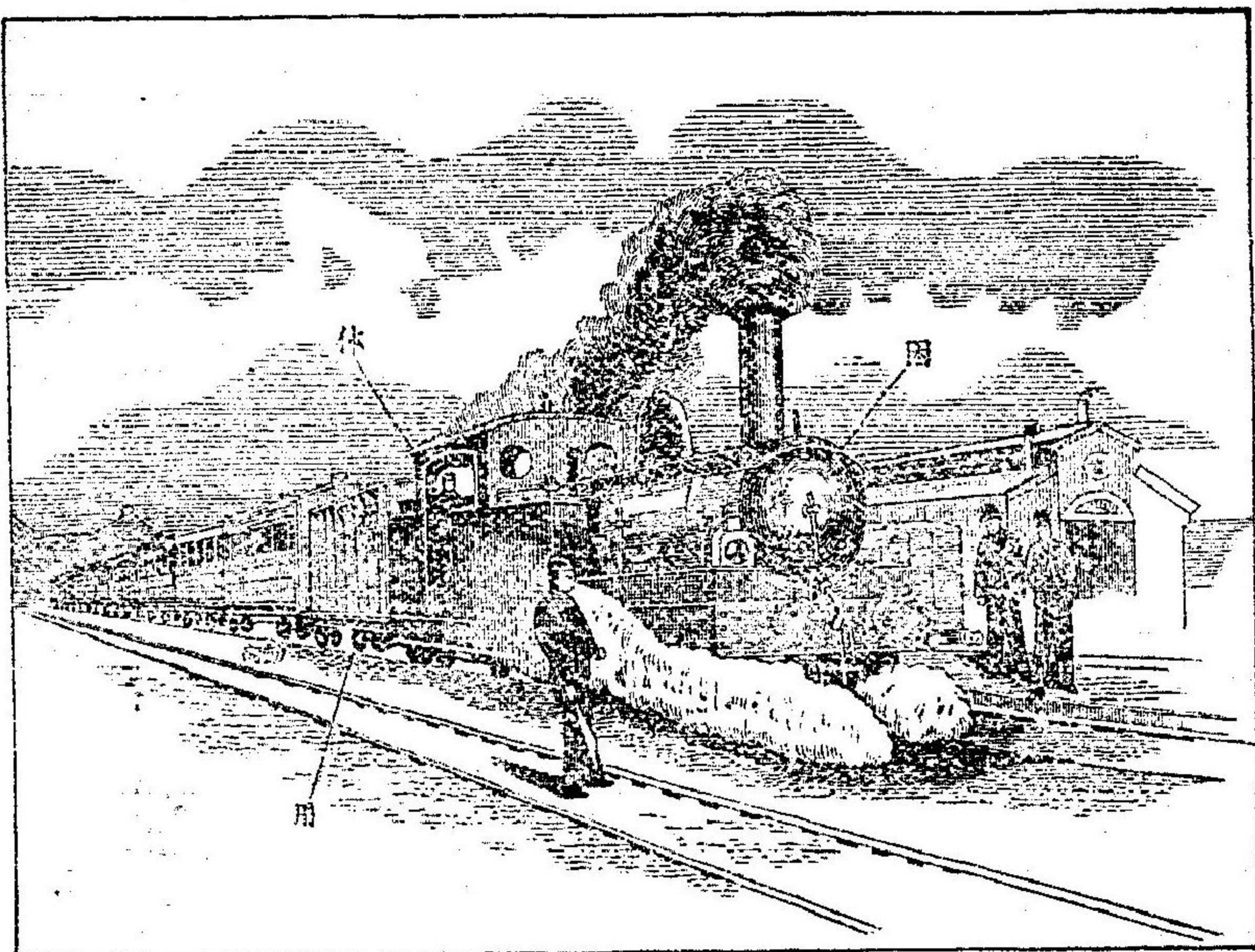
は主格名詞の語尾に添は
りには地位格に添はりを
は目的格に添はるべき質
理あるをもつてなり。あ
つる字は靈辭とするを適
切とす。然るに落合直
文氏は

助辭

と稱へたり。こは「てに
をば」の性質効用の何た
るを未だ辨知せざるもの
いふべき名稱といふべし
そは名詞や動詞を助けな
す意に誤認せしにもや
果して然らば主客その地
位を違へ語法の原則に反
せるひがごとといはざる
を得ざるなり。この靈辭
は靈辭が創始せる説なる
をもつて世を誣ひ事をこ
のみてにはあらず。我が
日本語法の尊卑優劣一關
すればやむを得ざるなり

○中根淑氏 大和田建

詞辭ノ
三大別
ヲ 瀧車
ノ 運轉
ニ 比シ
テ 其ノ
原則ヲ
示ス 圖



樹氏は

後詞

と稱へ物集高見氏は

接辭

と稱へ

○那珂通世氏は後置

言と稱へたり

いづれも「てにをば」の性
質効用の何たるを辨へざ
るものゝごとし。名は實
の資なり。その性質と効
用とに適切の稱を得ずば
學生をして理想的に會得
徹底せしむるに難きのみ
ならず開發的の教授法よ
りむけり。學者活眼をひ
らきてその得失を判定せ
よ。

○大和田建樹氏は和

文典に目を

名詞

動詞

形容詞

たどふるもその體用因の三つあひ須ちて活動をなすの理
はみな同規一轍の原則なり。さればそを口音に寫眞する
の詞かれはこをその體用因に準則して名詞動詞靈辭の三
部門に大別してその由るところその司るところを判定せ
しはもとより誣ふべからず犯すべからざるの原則たり
されば人類動物の身體は靈魂を離れては一日も生息する
あたはずたちまちに活動を廢し死物と歸すべし。瀧車時
計のごときもその機關の因を離れてはその運轉を廢し死
物に屬すべし。活語の妙用まつたくこれにひとし。ゆゑ
に靈辭すあはち「てにをば」を離れてはさらに意味通ぜず
名詞動詞ともに死物に屬するものと心得べし
たゞし動詞に語尾の變化あるが如きはたゞ靈辭配置の

- 副詞
- 後詞
- 接續詞
- 感詞
- と類別せり
- 物集高見氏は初學
- 日本文典に目せ
- 體言
- 用言
- 接辭
- と類別せり
- 中根淑氏は日本文
- 典に目せ
- 名詞
- 代名詞
- 形容詞
- 動詞
- 副詞
- 後詞
- 接續詞
- 感歎詞

箇所を區分するの便に供ふるのみにて僅かにその活用の基礎をなすに過ぎざるあり たとへば身體に動作を要するの便に關節を具へ滾車に運轉を要するの便に車輪を具へたるがごとし 由るに語尾の變化のみにてはたゞ時の機轉を辨ずべき基礎と意味の變化を自在ならしむべき樞軸とをなすに過ぎざるものとす

ゆゑに靈辭は言語の精神あり 活語の靈魂あり 名詞は活語の體のみ 動詞は活語の用のみあり

けだし我が日本語法の外國語法に冠絶してその活用の神奇靈妙ある遠く比較の外に踰えたるはたゞこの靈辭すなはち「てにをは」にすこぶる富みて完全せるをもつてなり これすかはち本邦語はひとり腦髓の發達に富

- 冠詞
- 掛ヶ詞
- 複語
- 熟語
- と類別せり
- 那珂通世氏は國語
- 學に目せ
- 體言
- 用言
- 副言
- 後置言
- 感動言
- と類別せり
- 關根正直氏は國語
- 學に目せ
- 體言
- 活用言
- 天仁遠波
- と類別せり
- 高津敏三郎氏は日
- 本中文典に目せ

み外國語はなべて腦髓不完全あることたとへば下等動物のごとし こそ比較せば人類の頭腦と蟲魚の頭腦とはその優劣をあひ異よせるがごとし 予がこの「てにをは」に靈辭の熟字を宛てたるは皆にその實理に適切せるのみにあらず 我が大日本帝國の語法をして海外各國語の上に凌駕せしめ併せて人種の由來國體の尊卑を判定するに重大の關係あるをもつてあり

上に講述せる言語の大別を系線に表明しもつて記憶の便にそなふる左のごとし



動詞
形容詞
名詞
代名詞
副詞
接續詞
感動詞
關係詞
補助詞
附加詞
と類別せり
いづれを見るも更に一定の規律なきもの、ことし
さるは三種に別かてるあり
五種に別かてるあり
七種に別かてるあり
また十種に別かちたるあり
十二種に別かちたるあり
ちたるあり
その目次乙に入るべきもの甲乙屬し
甲乙入るべきもの乙乙屬し
諸説紛紜ならに一定の法規なきもの、ことし

第二章 名詞

名詞とは事物の名を呼びなす用ふる詞をいふ ちかとしてその語尾變化せざるを定義とす ゆるにまた體言とも稱す

たゞし語尾の變化を要せざる理由は動詞のごとく活用の基礎をかすべき特性を具へざるをもつてなり

名詞は文章組立の上において常に動詞の上にくらわじ一章句中その文意の由てもとづく基本となるものと知るべし たどへば

- 熊が山よ歩む
- 鷺は空を飛ぶ
- 毬も轉ぐなり

箱の蓋を開く

色白し

かどやうの「熊山鷺空毬箱蓋色」の類のごとくその語尾變化し得べからざるものこれなり

第三章 動詞

動詞とは事物の動作を指して呼びなす用ふる詞をいふ ちかとしてその語尾變化するを定義とす ゆるにまた用言とも稱す

たゞし語尾の變化を要する理由は活用の基礎をかすべき特性を具へたるをもつてなり

動詞は文章組立の上において常に名詞の下にくらわじ一章句中その文意の趣き千變萬化すべき妙用を志めすもの

こは畢竟言語は万有活物の實理に則どり、それが眞影實況を口音に寫眞するものがといふの理をさとり得ざるよ坐せるなり
その原則にさとり得ば動物の舉止發作に基づく活理の原則たる除用固の三大別を準則して詞辭門は自然その目を

名詞(体言)
動詞(用言)
靈辭(てよをは)
の三種に別せざるを得ざるなり さるを大別にするべきものも小別にすべきものも細目にたぐべきものも差別なきがごとく錯雜混亂うたて語法の何たるを辨へ知らざるがごときは何ごともや 實に學生のために愛國のため、懺悔しべきの國事といふべし

と知るべし たとへば

熊が山に歩む

鷺は空を飛ぶ

毬も轉ぐかり

箱の蓋を開く

色白し

かゞやうの「歩む飛ぶ轉ぐ開く白し」の類のごとく

歩む は あゆま あゆみ あゆむ あゆめ

飛ぶ は とば とび とぶ とぶ

轉ぐ は ころげ ころぐ ころぐる ころぐれ

開く は あけ あく あくる あくれ

白し は しろし しろき しろく しろけれ

とやうにその語尾變化と得べきものこれなり

第四章 靈辭

靈辭とは事物動作の由るところそれが變化の基づく因を示すに用ふる辭にてすまはち名詞および動詞の語尾にそはりて文意を起因し章句文脈の死活斷續をして千變萬化せしむるものをいふ ゆるままた神辭とも稱す 此は言語の精神にしていはゆる「てにをは」これなり

たゞし靈辭は名詞動詞の語尾にそはり獨りたちてはその用をかさず 其が理由は物を主宰すべき効力を有しその物につきてそが精神とかりそれが變化運用を左右すべき特性を具へたるをもつてなり

靈辭は名詞の語尾よそはりてはそが名詞の位における格

を定め動詞の語尾にそはりてはそれが動詞の變化よおける
法を定むるものと知るべし たとへは

熊が山に歩む

鷺は空を飛ぶ

毬も轉ぐなり

箱の蓋を開く

などやうの「がにはをもありのを」の類のごとく名詞動詞
の語尾にそはりてその位の格その變化の法を定むるもの
これなり

たゞと傍に記せる「畫は主格名詞にそはる辭あるを示

し」畫は目的格に「畫は地位格にそはる辭なるを示し

「畫は接續なるを示し」畫は結尾あるを示すあり

文意ノ由ツモトテノ基ヲ本タル物ヲ示ス



熊 鷺 球 箱

なほ上よ講述せる名詞と動詞との差異辨別をいま「熊
鷺毬箱」の四品よつきて説きあかさん たとへは

と言ふときは左の圖よなめせるごとくその物體をその在

るが儘に指して名づけ呼びなす詞を名詞といひまた
體言とも稱するなり

志かるよその物の動きはたらく上を指して

歩む

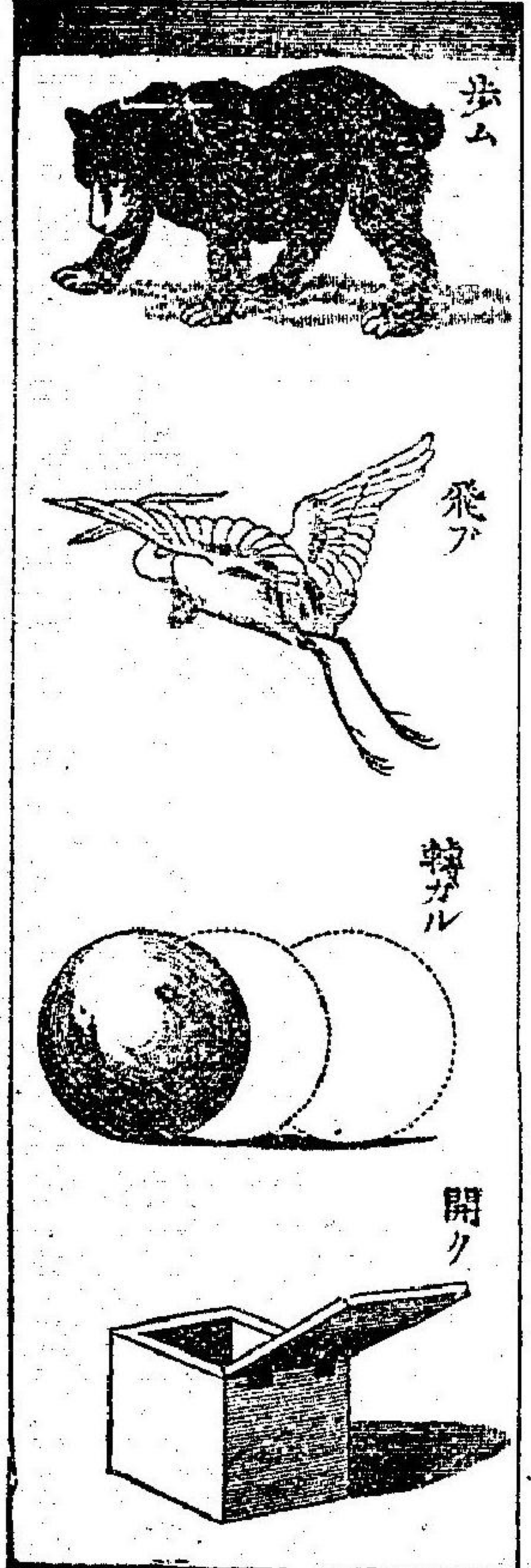
飛ぶ

轉ぐ

開く

と言ふときは左の圖にあらせむごとくたゞその物の動作

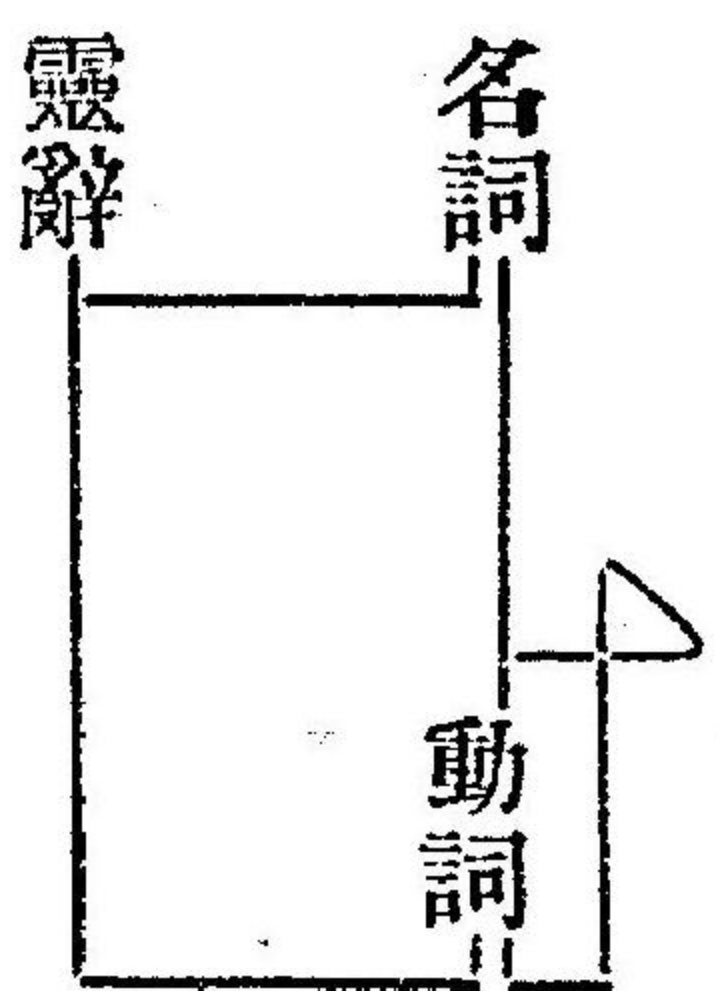
文意ノ千ス万ノキス用ル體動ノス
意辭化バ物ノ作示



運用の上のみ就きて呼びなす詞なれば動詞といひまた

用言とも稱するなり

上は講述せる名詞動詞靈辭の配置およびその連絡するところの關係を系線に表明しもつてその法規の由るところのものを知らしむる左のごとし



第五章 名詞の類別

名詞は性質の上につきこれを類別して

實名詞

○落合直文氏は体言の目々

代名詞

副詞

接續詞

歎詞

と類別せり 不規律もまた甚しと謂ふべし 是は代名詞と對し實名詞の目なきはしばらく想してたゞも餘音の類別中副詞接續詞歎詞を列舉せるは何とぞや 名詞代名詞など一列に部わけすべきものあらす 副詞接續詞歎詞は文章論中の部わけし屬すべきものなり 其の理由何となれば名詞代名詞の類は文章組立法の主要法に屬し副詞接續詞歎詞のことはその補修法に屬すべきものなりゆゑに名詞種類わけのうちに論すべきものならざるなり

○落合直文氏らは名詞の細目と

代名詞

の二種とす

第一節 實名詞

實名詞とは事物を實名のまゝに呼びなすに用ふる名詞をいふ 實名詞といふは代名詞といふがあるに對しての名と知るべし

たゞし有形無形の別を問はず實名の儘に言ひなす限りの名詞はすべてこれに算入せり

實名詞は性質の上よつきこれを類別して

普通名詞

固有名詞

作用名詞

存在名詞

形狀名詞

象況名詞

の六種とす

第一款 普通名詞

普通名詞とは同種屬各箇の物よ普く通じ得べき限の實名詞をいふ 普通名詞といふは固有名詞といふがあるよ對しての名と知るべし すなはち

- | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人 | 馬 | 熊 | 鷺 | 櫻 | 花 | 風 | 月 |
| 山 | 國 | 友 | 旅 | 心 | 氣 | 力 | 形 |
| 色 | 時 | 所 | 主 | 數 | 品 | 位 | 躰 |
- の類これあり

有形名詞

無形名詞

普通名詞

固有名詞

と別かち

また普通の名詞外に

居名詞

略名詞

合名詞

の名稱を下すことありと説けり いと難し 合名詞はこの部わけの中に算入すべきものにあらず 何となればこの部門は單性の種類を別かつべき餘なり 合名詞は複性の部門に論すべきものなり また自餘の部わけも規律その正しきを得ず 言ふはも足らぬことながら有形名詞無形名詞の別を立てしはいかにや 是は語法上何の必要ありてか

この目を設けたるは物よりては到底辨別しがたきもの多し たゞ眼の形の感觸する有無によりて區分するのみにて更なる性質効用に關せざれば文章組立上につきしも益なく全く無用の部わけといふべし

第二款 固有名詞

固有名詞とは一事一物にのみ限る固有の名稱よて他よりひろく通ぜざる實名詞をいふ 固有名詞といふは普通名詞といふがあるに對しての名と知るべし すかばち

- 鎌足 清磨 正成 賴朝 富士 筑波
- 日本 武藏 嵯峨 吉野 池月 摺墨

の類これなり

第三款 作用名詞

作用名詞とはもと成立は作用動詞あるをその語尾が過去に言ひ居りたりまたはその轉用の語尾は名詞を含めて名詞の格よ言ひあす名詞をいふ 此は作用動詞より成り立てる限りの名詞はこれよ算入せり 成立上これを細別して

居作名詞

活作名詞

の二種とす

第一目 居作名詞

居作名詞とは作用動詞の語尾が過去の格に言ひ居りて作用名詞の格に言ひあす名詞をいふ いま扇氷といふ詞につきて言はんは扇も氷も元來作用動詞にて扇は空氣を扇ぎて風を出たす作用を示すにいふ詞かれは すなはち
あふが あふぎ あふぐ あふげ
とやうは語尾の變化すべき作用動詞あるを

あふぎ

と言ひ居りて一つの器具よいひあす一種の名詞となれ

るがごとし

また氷の流動體の水をして固形體たる氷といふ物に凝結せしむるまでの作用を示すなれば すなはち

こほら 　こほり 　こほる 　こほれ

とやうに活く作用動詞たるを

こほり

と言ひ居わりて一つの固形體にいひかす一種の名詞とされるがごとし

この居作名詞はもとの動詞の成立によりてその語尾が五十音圖のい列「きしちにひみじり」に係かるものとえ列「えけせてねへめえれる」に係かるものとの二種あり
い列なるは たどへは

あふぎをもてあふぐ

こほりが解くる

とやうの「あふぎこほり」のごとくい列の「きり」の類を音がその語尾とある類をいふ 　かほ類例をえめさん 　すあはち

ひっき 　響

ゆると 　許

あやまち 　過

まに 　死

まなび 　學

かすみ 　霞

むくい 　報

けむり 　烟

の類これかり

え列なるは たどへは

をこへを受くる

あがれが清し

あそやうの「をし」あがれ」のごとく「え列の「へれ」の類なる音がその語尾となる類をいふ あほ類例をえめさん

こゝろえ 心得 たすけ 助

おふせ 仰 くはたて 企

かさね 重 をしへ 教

ながめ 眺 つひえ 費

あがれ 流 うゑ 飢

の類これあり

この居作各詞に語尾の省かりたるあり いま雲歌といふ詞につきて言はんはんに雲も歌も元來作用動詞にて雲は氣の蒸しのぼりて空を曇らする作用に成りたるものなれば

すなはち

くもり くもり くもる くもれ

とやうに語尾の變化すべき動詞あるを

くもりのりの省かりて くも

と言ひ居わりそが語尾の省かりて一種の名詞とされる類のごとし

また歌はもと歌ひものにて すなはち

うたは うたひ うたふ うたへ

とやうに活く作用動詞あるを

うたひのひの省かりて うた

と言ひ居わりてそが語尾の省かりて一種の名詞とされる類のごとし すなはち

十一月一日の出版に係る日本語學發達に既に創明しおきしものをや、界劣といふべし

鶯の鳴くべきを待つ

雨の降るらんが詫びしよ

なごやうの「往かん鳴くべき降るらん」の類これあり

過去あるは たごへは

人の往きしを慕ふ

鶯の鳴きたりしを喜ぶ

雨の降りけんが想ひやらる

なごやうの「往きし鳴きたりし降りけん」の類これたり

已然あるは たごへは

人の往きたるを羨む

鶯の鳴きつるがゆかしさ

雨の降りたるを知る

なごやうの「往きたる鳴きつる降りた」の類をいふ

第四款 存在名詞

存在名詞とはもと成立は存在動詞あるをその語尾が過去に言ひ居ゐりまたはその轉用の語尾は名詞を含めて名詞の格に言ひなす名詞をいふ 此は存在動詞より成り立てる限りの名詞はこれに算入せり 成立上これを細別して

居存名詞

活存名詞

の二種とす

第一目 居存名詞

居存名詞とは存在動詞の語尾が過去の格に言ひ居ゐりて存在名詞の格に言ひなす名詞をいふ いま井といふ詞に

この存在名詞の名稱も斐臣が創明なり

この居存名詞の名稱も斐臣が創明なり

つきて言はん井はもと存在動詞よて水が流れずよ一つ所に溜り居る義の詞なれば すなはち

あゝゝゝ

とやうに語尾の變化すべき存在動詞あるを

わ

と言ひ居わりて一つの物體よいひかす一種の名詞となれるがごとし すなはち

井*

の類これなり

第二目 活存名詞

活存名詞とは存在動詞の時の既方將を問はずその語尾に名詞を連ね合はせたる意味を籠め合めて存在名詞の格に

この活存名詞、靈臣が啓發なり 從來在り册れたる語學書にはなべてなし

いひかす名詞をいふ こそその語尾に名詞よそはるべき「がにをはもぞやこそ」かどの靈辭がそはるをもて名詞の資格に變質せるを證明して會得すべし たとへは

・ 神の有るを信ず (神の有る事を信ず)

世に在るが樂しさは (世に在る事が樂しさ)

居らんを訪はんは (居らん所を訪はん)

居りとも知らずは (居りし事も知らず)

とやうにいふ意味よてその「事處」といふ名詞が省かりそれが意味のみ含まりて一種の名詞とされる類のごとしこの活存名詞も時の既方將によりて細別あり

方然なるは たとへば

永く世よ在るを欲す

都に居りぬるも嬉し

なごやうの「在る居りぬる」の類これあり

將然なるは たごへは

この家には永く在らんを望む

都に居るべきに定まりぬ

かごやうの「在らん居るべき」の類これあり

既然あるは たごへは

今まで知らで在りしを耻づ

こゝに居りたりとは昔あり

なごやうの「在りし居りたり」との類これなり

已然なるは たごへは

學校に往けるを見届けたり

故郷に歸れるが嬉し

家よ居れるも久し

かごやうの「往ける歸れる居れる」の類をいふ

第五款 形状名詞

形状名詞とは事物の形状および情態を指定するに用ふる

名詞をいふ 此は普通名詞固有名詞作用名詞存在名詞の

ごとく物の本体たるべき實名詞に對してそれが副体たるべ

き資格ある一種の名詞にて形の「方圓大小長短」色の「模様」

感情の状態」をもを辨すべき名詞はすべてこれに算入せり

(予がこの形状名詞の目を立て、世に唱へそめしは明治廿二年十一月一日の出版に係る日本語學發家といへる書にもせしを始とす)

形状名詞は文章組立の上において物の主客本副を判定し

もつて文章を精確からしむるに文法上必要の部別と知る

○從來の語學家が用言中形状言の目を立てながら體言中にこの名詞の目を立てざりしは、
此は獲臣が創唱にて先哲未發の新説なれば或はいふかる人しあるべけれど普通名詞固有名詞作用名詞存在名詞の目を立つるに對比するときはこの形状名詞の目を立てざるを得ざるなり なほかつ働

詞の類別に作用動詞
存在動詞 形状動詞
の目を立てたるに比強す
るも學理上誣ふべからず
犯すべからざるの條理た
り 學者潛思熟慮してそ
の誣言ならざるを知れ

従来の語學家がこの
居形名詞の目を立て
ざりしはいかにぞや
と 聖臣が啓蒙なれば訝
かる人もあるべけれど和
名抄に權衡を「波加利力
於毛之」とあり 於毛之
はずなほ重しかり 幸
た芥子きからし」といふ
も辛しなり 幸は「悲し
妹」空し煙の悲し空し
し名詞の發格から下の

べし 性質の上につきこれを細別して

居形名詞

活形名詞

の二種とす

第一目 居形名詞

居形名詞とは形状動詞の語尾が過去の格に言ひ居わりて
形状名詞の格に言ひあす名詞をいふ いま辛しといふ詞
につきて言はんは辛しは元來形状動詞にて辛しは味の感
觸を示すにいふ詞なれば すなはち
からし からき からく からけれ
とやうに語尾の變化すべき形状動詞なるを
からし

名詞に連なりたる合名
詞なり いろいろ例に徴
して誣言ならざるを知れ

と言ひ居わりて一つの彩色にいひあす一種の名詞となれ
るがごとし たどへは

悔やしのことや

この辛しは利きがよし

この衣に重しを置く

などやうの「悔やし辛し重し」の類これかり なほこの類
例を志めさん すなはち

しろし 白 くろし 黒

あかし 明 あをし 青

まるし 圓 たかし 高

の類これかり

この居形名詞に語尾の省かりたるあり すなはち白とい

ふ詞よつきて言はんよ

ゑろし ゑろき ゑろく ゑろけれ

とやうに語尾の變化すべき形状動詞なるを

ゑろし の と の省かりて ゑろ

と言ひ居わりそが語尾の省かりて一種の名詞となれる類のごとし たどへば

こはたかの知れたることぞ

おもなのわさかか

この碁はくろが勝かり

かどやうの「高面無黒」のごとく語尾の「し音」が省かりたる類をいふ なほこの類例をまめさん すおはち

ゑろ 白 あか 赤

あを 青 まる 圓

の類これかり

第二目 活形名詞

この活形名詞も藝臣が啓蒙なり 従來在り罷れたる語學書にはなべてこの目あることなし

活形名詞とは形状動詞の時の既方將を問はずその語尾の名詞を連ね合はせたる意味を籠め含めて形状名詞の格といひなす名詞をいふ 此はその語尾に名詞にそはるべき「がれをはもぞやこそ」などの靈辭がそはるをもて名詞の資格に變質せるを証明して會得すべし たどへば

色の白きを好む は (色の白き事を好む)

花は赤きが美し は (花は赤き色が美し)

風は涼しきを良き は (風は涼しき程を良き)

なごやうにいふ意味にてその「事色程」といふ名詞が省か

りそれが意味のみ含まりて一種の名詞とされる類のごと
し この活形名詞も時の既方將によりて細別あり

方然なるは たどへば

寒かるを厭ふ

いま樂しかるは苦學の結果なり

なごやうの「寒かる樂しかる」の類これなり

將然なるは たどへば

寒からんをかねておもはる

つひに樂しからんがたのしみぞ

悲しかるべきぞ想ひやらるゝ

なごやうの「寒からん樂しからん悲しかるべき」の類これ
あり

既然あるは たどへば

寒かりしを今思ひ出づ

もど樂しかりしも今は苦なり

嬉しかりけんがおもはる

なごやうの「寒かりし樂しかりし嬉しかりけん」の類これ
あり

已然あるは たどへば

寒きを速へとのぶ

樂しきが何よりぞ

月は朗けきを愛す

嬉しかりつるぞ忘れがたき

なごやうの「寒き樂しき朗けき嬉しかりつる」の類をいふ

従来語學家がこの象況名詞の目を立てざりしゆかにぞや。こはたゞの實名詞といひしなみよ混稱すべからざるは論なくまた形状名詞とも混同すべからざるものなり。こも藝臣が啓發なれば訝かる人あるべけれど深思熟慮して文法上の論與學理を推究せば自然その証言ならざるを思ひざり得べし。

第六款 象況名詞

象況名詞とは事物の形状の上を更に象りてその模様を指定するに用ふる名詞をいふ。こは形状名詞なる「方圓大小高低多少」等のもの上につき更にその精密なる模様を辨すべき名詞はすべてこれに算入せり。

象況名詞もまた文章組立の上において物の主客本副を判定しもつて文意を精確からしむるに文法上必要の部別すること形状名詞に同じ。性質の上につきこれを細別して

- 方象名詞
- 寫象名詞
- 測象名詞
- 數象名詞

の四種とす

第一目 方象名詞

方象名詞とは本體たる普通名詞に附從してそが副體たる形状の上につき更にその部邊方位を指定するに用ふる象況名詞をいふ。たとへば

- 門の前を過ぐ
- 人の後に立つ
- 頭の上に戴く
- 足の下に踏む
- 水の中に入る
- 室の内を掃く
- 家の外へ出づ

従来語學家がこの方象名詞の目を立てざりしはいかゞぞや。こはたゞの普通名詞といひしなみに混同すべからざるものなり。名詞の主客本副を指定し文意を精確ならしむるに文法上必要の部別を知るべし。

左を向く
 右へ除く
 山の奥へ入る
 野の末を見わたす
 森の蔭に涼む
 海の底に沈む
 川の端を通る
 庭の東に見ゆ
 住居の西にわたる
 燈の影が暗し

なごやうの「前後上下中内外左右奥末蔭底端東西影」の類
 のごとく本體たる事物の部邊方位を指定すべき副體たる

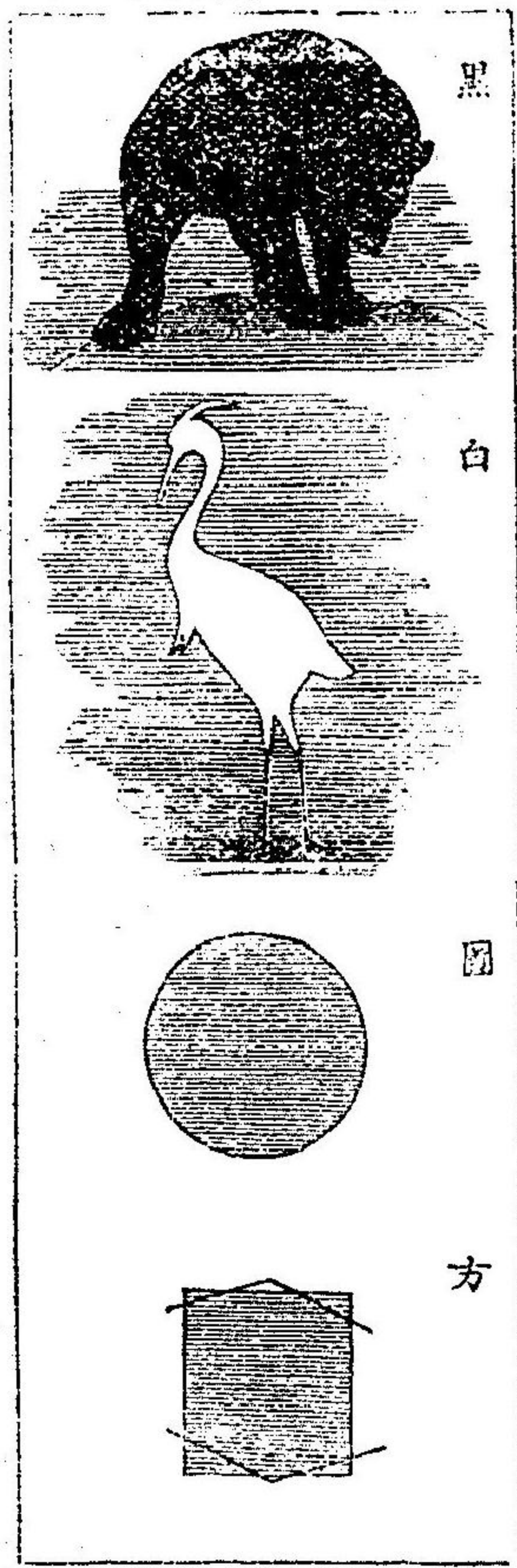
を會得すべし

上ノ講述せる普通名詞と形状名詞との差異および普通名

物ノ本體ヲ示ス

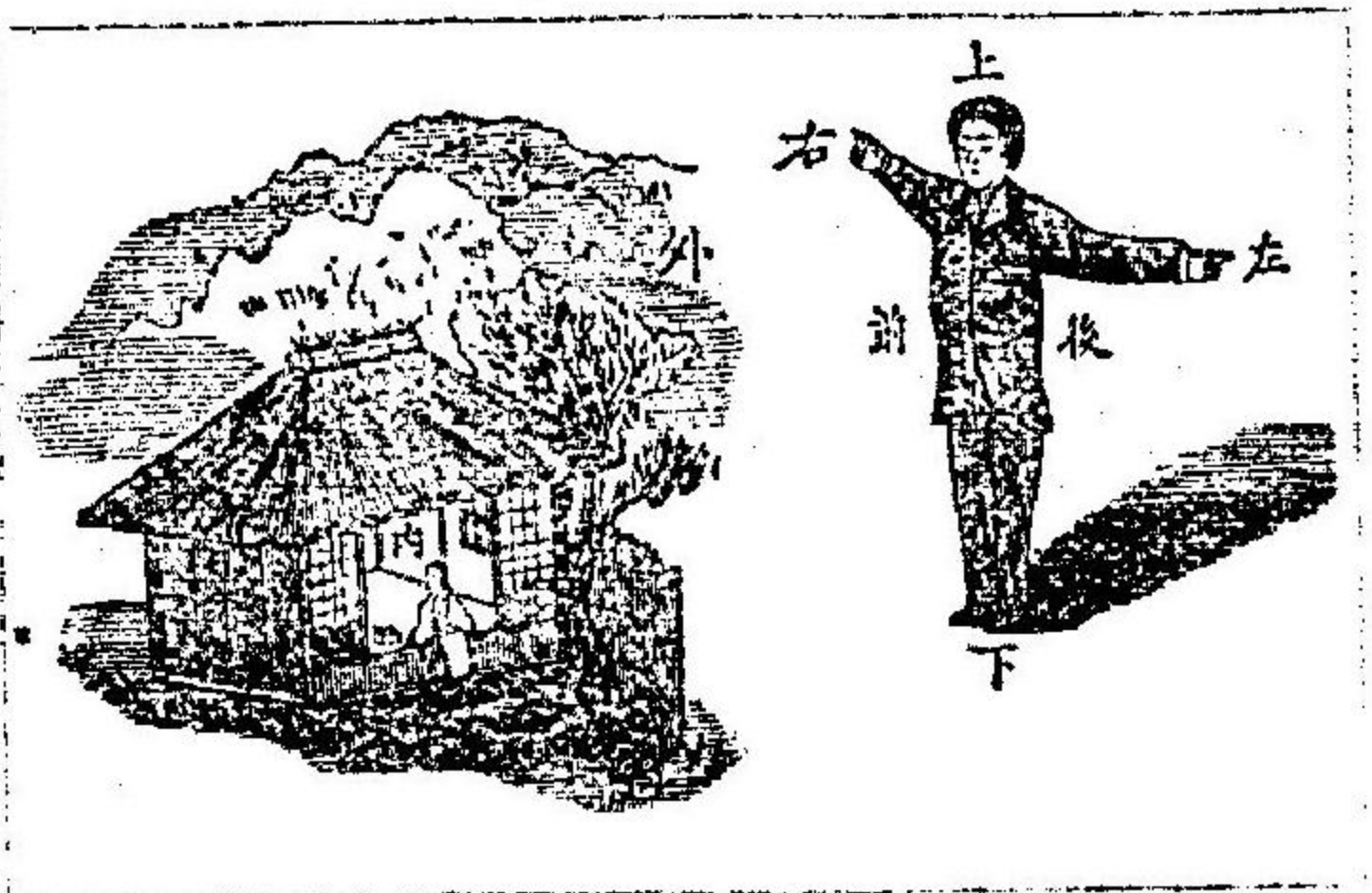


物ノ副體ヲ示ス



詞と象況名詞との辨別をいま圖をもつておこしめと一目その意義を會得徹底せしむ

物ノ副體
ルニ形ノ
上ノオケ
位ヲノ方
スベキ象
ノ上下左
右前後ヲ
示ス
同シク
ノ方位
指定スベ
キ象ノ内
外ヲ示ス



第二目 寫象名詞

從來語學家がこの寫象名詞の日を立てざり

寫象名詞とは他に在る事物の實形を寫影してこれが實況

しはいかにぞや 淺識といふべし 予かつて明治廿二年十一月一日の出版に係かる日本語學發蒙に創めて世に

寫影形詞

と唱へこの目を啓發せしかば本編よりは斯く改稱せり 此は名詞の主客本副を指定し文意を精確ならしむるに文法上必要の部別を知るべし

を象どりて形容するに用ふる象況名詞をいふ 此はその語尾にかならず「やかよからかかさびひけ」の辭がそはりていひあすものと知るべし たとへば

かれは花やかを好めり

氣質は直よかぞよき

聲は高らかがゆかし

水は清らを愛づ

燈は幽かぞ淋しき

すこしも憎げがなし

われは雅びを好む

あざやうの「花やか直よか高らか清らか幽か憎げ雅び」の類これなり 今ほこの類例をまとめさん

從來語學家がこの測象名詞の目を立てざりしはいかにぞや 予かつて明治廿二年十一月一日の出版に際する日本語

穩やか	速やか	賑やか	際やか
長やか	嬋やか	嫺やか	和やか
麗らか	滑らか	晴らか	緩らか
中ら	清ら	朗か	圓か
豊か	仄か	遙か	長閑か
清げ	寒げ	淋しげ	嬉しげ
神さび	翁さび	老長び	鄙び

の類これあり

第三目 測象名詞

測象名詞とは事物の「大小長短高低深淺」を測度するに用ふる象况名詞をいふ ことはその語尾にかならず「さみ」の辭がそはりていひをすものと知るべし たゞへは

學發家に創めて世に
測度形詞
と題へこの目を啓發せし
かど本編には斯く改稱せり
こは名詞の主客本副
を指定し文意を精確なら
しむるに文法上必要の
部別を知るべし

大さはいかに
長さを比ぶ
高さを測る
深さが知られず
長閑けさに浮かる
厚みがそれよりも厚し
重みが強し

なごやうの「大さ長さ高さ深さ長閑けさ厚み重み」の類こ
れなり かほ類例をまめさん

太さ	重さ	廣さ	痛さ
寒さ	白さ	赤さ	涼しさ
淋しさ	朗けさ	寒けさ	味み

苦み 深み 繁み 面白み
の類これあり

第四目 數象名詞

數象名詞とは物の員數および度量順序を算計ふるよ用ふる象況名詞をいふ 性質上これを類別して

原數象

順數象

量數象

の三種とす

原數象とは「それは何個」「これは幾つ」とやうに物の數を算ふるに用ふる數象名詞をいふ たどへば
時計が鳴る一つ二つ三ついま三時あり

從來わが國の語學家がかつてこの數形名詞の目を別に立てずして普通名詞中に混入せしはいかゞや ことばの普通名詞とひとしなみに混同すべからざるものなり 何となれば本主たる物體がありてその數いかゞを形容するよ用ふる詞にて獨り立ちての性質にあらざればなり なにかつ他の名詞と異なるときは形容詞の資格となる特性を具有せる一種の詞なり 落合直文氏が中等日本文

典にこの別なく混同して設けり いまだしき學力といふべし

鐘は四つうちたり
兒どもは五つ六つよかりぬ
物の數は七つをきらふ
その品は八つに揃へたし
あの兒は去年九つありしかは十ぞ
齡は百にあまる
その數ほとんど千をもてかぞへ萬にも餘れり
今年六十ちまり一つにかりぬ
御世は八百萬世
かぞやうの「一二三四五六七八九十百千萬六十八百萬」の類これなり

順數象とは「第何號」「第幾番」とやうよそが數の順序を追ひ

從來語學家がこの順數象の細目を立てずし

て普通名詞といひまし
なみに混稱せしはいかよ
ぞや 此は數象名詞
に屬せる一種のものなり
他の名詞と混すべか
らざる詞なり

て算ふるに用ふる數象名詞をいふ 此はその原數象の名
詞の語首にそはる「第」または語尾にそはる「番號」などの詞
あり たとへば

第一第二と順を算ふ

三號四號の附録

五番六番と席順を呼びあぐ

七返八返と度數を重ぬ

九回十回までの度が及ぶ

十一等十二級などに至る

十三篇十四章または十五條を見よ

そは二つ目か三つ目にあり

その品類は五種や六種ではあるまじ

從來語學家がこの量
數象の細目を立てずし
て普通名詞といひまし
なみに混稱せしはいかよ
ぞや 此は數象名詞
に屬せる一種のものなり
他の名詞と混すべか
らざる詞なり

なごやうの「第號番返回等級篇章條目種」の類これあり
量數象とハ「何尺何寸幾斗幾升」とやうに物の尺度量目の
數れよびすべて物の部別アベレをなとその度量を辨するに用ふ
る數象名詞をいふ 此はその原數象の名詞の語尾に添は
る「尺寸斗升枚束」などの詞なり たとへば

長さは一丈二尺三寸五分ほどあり

この米は四石六斗七升八合九勺あり

酒をこのコップに五杯呑みたり

鉛筆を五六本も削れ速記に往くなら

繩を四筋ほど筵を十枚ほど

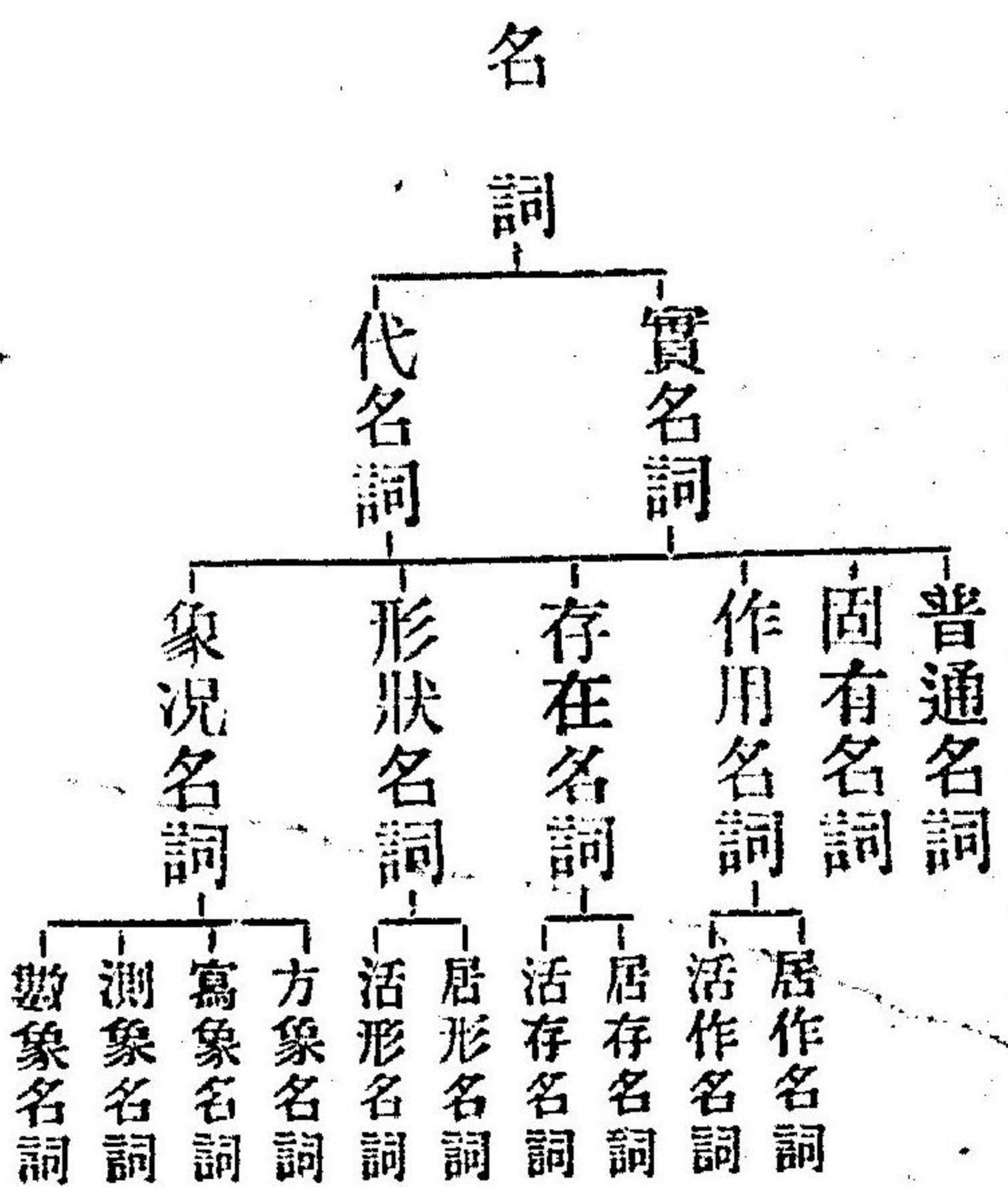
薪を五十束ほど米を八俵ばかり

鏡が二面證書が三通あり

紙を五帖薬を三貼
 小刀が二挺
 馬に三駄車一四臺
 職工が九人犬が三疋馬が二頭
 屏風を四雙立てめぐらせり
 客が八名來たれり
 演説が三席能樂が五座
 神は一柱ましませり
 歌を二首詠みたり
 語學書を五部小説雜誌を三冊
 作文書を四卷もてこよ
 太刀を二振弓を三張

車が二輛本箱が十二箇
 書翰が一封掛物が二幅
 盃が三組衣が七重に菓子カサを二折
 刀が七腰大砲が二門
 旗が四流馬具が十揃
 家が十軒土藏が三戸前

かどやうの「丈尺寸分石斗升合夕杯本筋枚束俵面逆帖貼
 挺駄臺人疋頭雙名席座柱首部册卷振張輛筒封幅組重折腰
 門流揃軒戸前」の類これなり
 上に講述せし實名詞の類別を系線に表明しもつて一目瞭
 然たらしめ記憶の便に供ふる左のごとし



第二節 代名詞

予かつて明治廿二年十一月一日の出版に係かる日本語學發蒙に代名詞の目を人稱代名詞

代名詞とは事物の實名に代りて文意を簡潔からむるに用ふる名詞をいふ 代名詞といふはすなはち實名詞といふがあるに對しての名と知るべし

指示代名詞 疑問代名詞 汎稱代名詞 〇落合直文氏はこの目

人の代名詞 指示の代名詞 疑問の代名詞 の三種とせり

〇大和田建樹氏は目を人代名詞 指示代名詞 疑問代名詞 と類別せり

〇物集高見氏は目を人名に代て呼ぶ事物を指稱するの二種に細別せり 〇大槻文彦氏は目を人代名詞

たゞし代名詞はその實名詞おほく重なる場合においてそれが複雑を防ぐために設くるものよして文章組立上必要のものとするべし

代名詞は性質の上につきこれを類別して

- 人代名詞
- 指代名詞
- 疑代名詞
- 汎代名詞

の四とす

第一款 人代名詞

人代名詞とは人の實名に代りて呼びなす代名詞をいふ その資格に據りて更にこれを細別して

指示代名詞

と類別せり

○那珂通世氏は目を

代名体言の人

代名体言の物

と類別せり

○關根正直氏は目を

人稱代名詞

普通代名詞

と類別せり

○高津嶽三郎氏は目を

入代名詞

指示代名詞

と類別せり

右に列記せる外なほいづ

れの語學書も大同小異

よて一つも組織を得たる

ものと思はれず 是は剛

くべからざる

汎代名詞

の目を立てず すべて語

學の力に論じまた淺しと

自己人稱

待遇人稱

離傍人稱

の三種とす

第一目 自己人稱

自己人稱とは對話するときそのあひ向ひあふ他人に對し

て自身の上を指して呼びなすに用ふる代名詞をいふ

るよまた第一人稱とも稱す たとへは

汝吾と共に花見に往かぬか

汝よ月見に往かば吾を誘ひてよ

吾は汝と彼とを友と思ふなり

あれは文章もて世に立たん

あは語學を好み

などやうの「吾と吾を吾はあれはあは」といふ吾あれあの

ごとき類これあり

第二目 待遇人稱

待遇人稱とは對話するときそのあひ向ひあふ自身に對し

て他人の上を指して呼びなすに用ふる代名詞をいふ

るよまた第二人稱とも稱す たとへは

汝吾と共に花見に往かぬか

汝よ月見に往かば吾を誘ひてよ

吾は汝と彼とを友と思ふなり

なれは何をか好む

なは年はいくつ

いふべし 何とすれば動

詞の類に取ける

代作動詞

の「ものす」「ことゝる」な

どの例にて「事柄」といふ

詞は汎く一般の實名詞

に涉りて代稱するよ必要

なる理由あればなり

しこの汎代名詞の「事

物」といふ詞は代名詞

にあらずとはばかの「物

す」「事とん」といふ詞を

またこの作用動詞と

せざるを得ざるなり

識者潛思熟慮してその正

否を判定せよ

指示代名詞

と類別せり

○那珂通世氏は目を

代名休言の人

代名休言の物

と類別せり

○關根正直氏は目を

人稱代名詞

普通代名詞

と類別せり

○高津嶽三郎氏は目を

入代名詞

指示代名詞

と類別せり

右に列記せる外なほいづ

れの語學書も大同小異

よて一つも組織を得たる

ものと思はれず、そは附

くべからざる

汎代名詞

の目を立てず、なべて語

學の方で識りまた淺しと

自己人稱

待遇人稱

離傍人稱

の三種とす

第一目 自己人稱

自己人稱とは對話するときそのあひ向ひあふ他人に對し

て自身の上を指して呼びなすに用ふる代名詞をいふ

るよまた第一人稱とも稱す たとへは

汝吾と共に花見に往かぬか

汝よ月見に往かは吾を誘ひてよ

吾は汝と彼とを友と思ふあり

あれは文章もて世に立たん

あは語學を好み

などやうの「吾と吾を吾はあれはあは」といふ吾あれあの

ごとき類これあり

第二目 待遇人稱

待遇人稱とは對話するときそのあひ向ひあふ自身に對し

て他人の上を指して呼びなすに用ふる代名詞をいふ

るよまた第二人稱とも稱す たとへは

汝吾と共に花見に往かぬか

汝よ月見に往かは吾を誘ひてよ

吾は汝と彼とを友と思ふなり

なれは何をか好む

なは年はいくつ

いふべし、何ぞれば動

詞の細目よける

代作動詞

の「あは」「こゝろ」は

その例に「事物」は

詞は汎く一般の實名詞

に涉りて代稱するよ必要

なる理由あればなり

しこの汎代名詞の「事

物」といふ詞は代名詞

よあらすはばかの「物

」「事」は「事」の詞を

もたんの作用動詞と

せざるを得ざるなり

讀者潛思熟慮してその正

否を判定せよ

かごやうの「汝汝よ汝とかれはなは」といふ汝なれなので
ときこれなり

第三目 離傍人稱

離傍人稱とは對話するときそのあひ向ひあふ人に對して
傍なる人もしくは他所に掛け離れ居る人の上を指して呼
びなすに用ふる代名詞をいふ ゆゑよまた第三人稱とも
稱す たとへは

汝彼を連れて花見に來よ

汝よ彼にこれを渡せ

吾は汝と彼とを友と思ふなり

あれは知人なりや

かごやうの「彼を彼に彼とをあれは」といふ彼あれのごと

きりこれを

第二款 指代名詞

指代名詞とは事物の實名を指し示す代りに呼びなすに用
ふる代名詞をいふ その資格に據り更に細別として

自己指示

待遇指示

離傍指示

の三種とす

第一目 自己指示

自己指示とは物品の二個あるときその向ふの方にある物
に對して吾が手許に近くある物を指して呼びなすに用ふ
る代名詞をいふ ゆゑにまた第一指示とも稱す たとへ

は

吾これを汝に與へん

吾が手に持ちたるこれは何である

君が許にあるそれとこれとは何れか良き

かどやうの「これをこれはこれと」といふこれのごときこれあり

第二目 待遇指示

待遇指示とは物品の二個あるとき吾が手許に近くある物に對してその向ふの方にある物を指して呼びなすに用ふる代名詞をいふ ゆゑに第二指示とも稱す たどへば

これを遣る代りにそれを吾に渡せ

君それをは吾に與へたまへ

汝が手に持ちたるそれは何ぞ

かどやうの「それをそれはそれは」といふそれのごときこれあり

第三目 離傍指示

離傍指示とは目前にそれとこれと物の二つあるに對してその傍に離れてある物品を指して呼びなすに用ふる代名詞をいふ ゆゑに第三指示とも稱す たどへば

汝が手に持ちたるそれと彼とはいづれか良き

あれは世にかき物あり

かどやうの「彼とはあれは」といふ彼あれのごときこれあり

第三款 疑代名詞

疑代名詞とは人および事物を指してその疑はしきを問ふ意に呼びあすに用ふる代名詞をいふ 性質上これを細別して

人稱疑問

指示疑問

の二種とす

第一目 人稱疑問

人稱疑問とは人稱の意よびあす疑代名詞をいふ たと

へば

そこにはたれか

來たりしはたぞ

たが文ある

この家居にはなれがとが住める

それがとが發起なり

おどやうの「誰誰某某」の類これなり

第二目 指示疑問

指示疑問とは指示の意によびあす疑代名詞をいふ たと

へば

これはなにぞ

それはなんぞ

その理由はいかま

そは如何ある

この説き明かしやいかゞ

これはいくら

君は今年幾つ
 時代は何時ぞ
 今何所にか居る
 そは何れをか正しとせん
 などやうの「何かん如何如何いかがいくら幾つ何時何所何れ」の類これなり

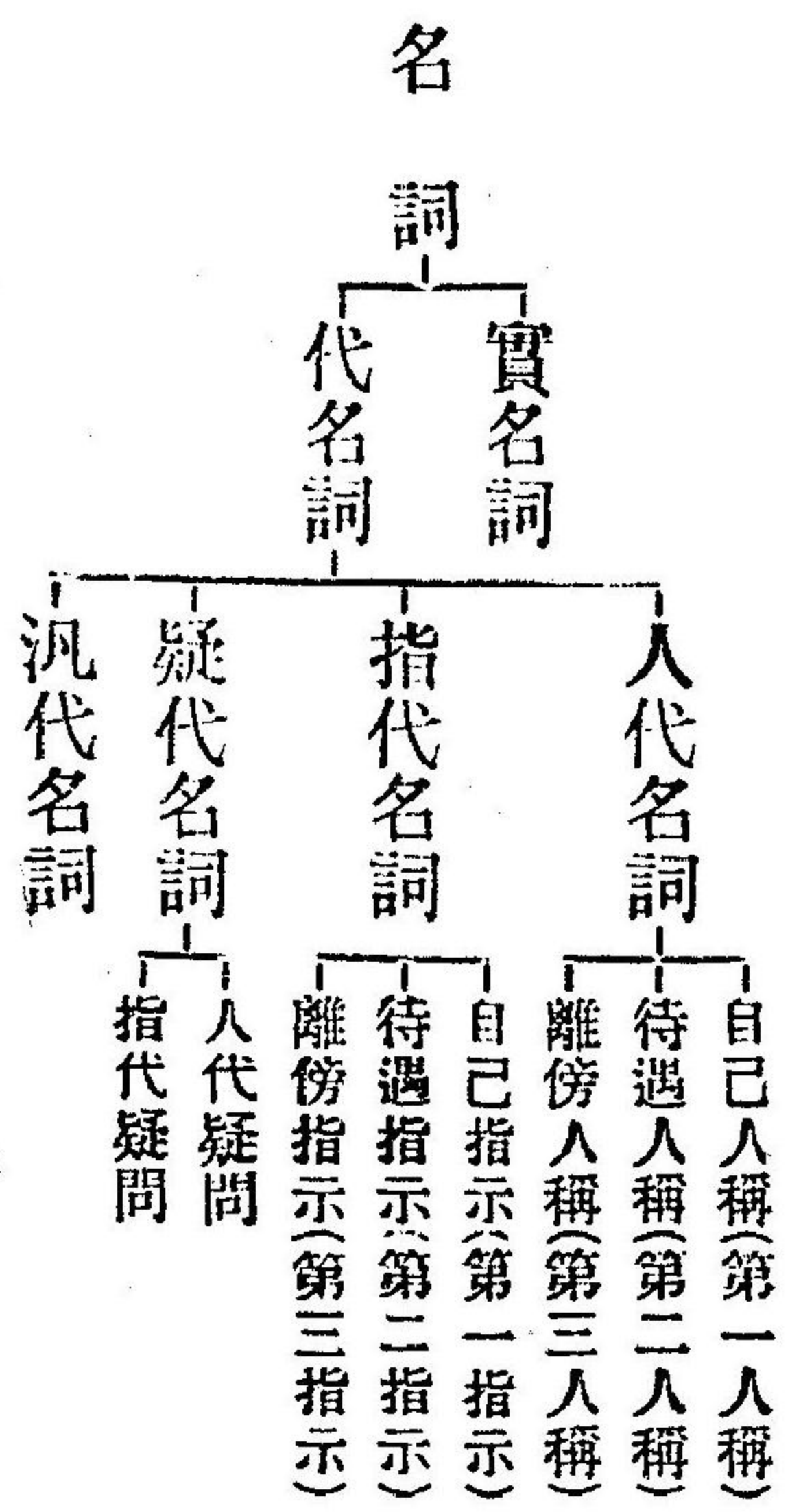
第四款 汎代名詞

汎代名詞とは汎く萬有群品の實名に代稱するに用ふる代名詞をいふ。たとへば

事を執る
 事にあたる
 われは物を見る

かれに物を送る
 これは物がよろし

などやうの「事物」のごときこれなり
 上に講述せし代名詞の類別を系線に表明をもつて一目瞭然たらしめ記憶の便に供ふる左のごとし



前章各條においてすでに實名詞代名詞中の成立効用性質
 およびその大小類別をことごとく詳かにせり 更に歩を

進めてそれが實名詞代名詞の各種を連ね合はせて一言にいひかす法則を講述せん

第三節 合名詞

合名詞とは實名詞代名詞の別を問はず二名詞連ね合はせて一言にいひかす合名詞をいふ

たゞと名詞にこの合名詞あるは動詞に合動詞ありまたその活用基法に合活基法あるに對しての部別アレッと知るべし

またその二言組み立てたる中以下あるが名詞あるときは合名詞とあり動詞あるときは合動詞とあるものと心得べし 此は語法一定の通則なり ゆゑに各種の名詞動詞の別なく一つの名詞の語首に他の詞を組み立て、

連合體にいひかす限はすべてこれに算入すべし(されば實名詞)

中普通固有用存在形状家宛なるか代名詞中人代指代疑代汎代なるか何れの名詞なるかを判定するよもかならずその下なる名詞の性質に據りてこれを辨知すべし また動詞に於けるもまた然り

またたゞの名詞と合名詞との辨別につき初學の思ひまがはざらんためこそが一定則をさしめめさん

清水 深山 四方 日本

大和 藤原 足利 螺旋

五月雨 十二月 御手洗

おどのごとく語釋の原義より論ぜは二言もしくは三言より成り立ちたるも言音約轉しすでに原義融化變質して一言とされる類は合名詞にはあらざるあり ざるを

清水湊 深山水 四方八方 日本人

大和魂 藤原氏 足利染 螺旋鏡
五月雨時 十二月頃 御手洗川

かどやうに連ね合はせて一言にいひあすときは合名詞と
かれるがごとし 思ひまがふべからず 性質上これを類
別して

對合名詞

形合名詞

尊合名詞

衆合名詞

疊合名詞

の五種とす

第一款 對合名詞

近頃刊行せし中等日本
文典といへる書より「清
みて呼ぶときは山と川、
春と霞と、のこになり
て合名詞にはならぬな
り」と落合直文氏ら
が論ぜしはいかによや
語學の力にいまたしきし
ひことなり もし然りと
せばこの種類の名詞をば
いかなる部門に算へ入る
べきか いとをさな
しといふべし 固ふにも
足らぬがごとくなり
らふに絶えたり

對合名詞とは實名詞代名詞の別を問はずあひ對立すべき
性質の名詞を二つ連ね合はせて二意一言よひあす合名
詞をいふ 此は文章組立上あひ對立する熟語を擇ぶに文
法上要用の部別^{アラ}を知るべし ちかうしてこの名詞はその
連ね合はせたる二言の間に「とにや」といふ辭の合まりて
省かりかつその合はせたる下の詞の語首を清みて呼ぶか
す例かりと心得べし たどへは

やまかは は (山と川) 山に川 山や川
おやこ は (親と子) 親に子 親や子

とやうにいふ意味よて二物の意とあるを連ね合はせて一
言にいひあす類のごとし (さるを合はせたる下の語首を濁りて「やまかははた
いふ辭の合まり省かりて全く一物の意となる例よて夫の形合名詞の部門) 性質上これを
一算へ入るべき異質のものとなるなり 初學の者思ひまがふべからず

細別して

- 普通對合
- 固有對合
- 作用對合
- 存在對合
- 形狀對合
- 象況對合
- 人代對合
- 指代對合
- 疑代對合
- 汎代對合

の十種とす

第一目 普通對合

普通對合とは普通名詞より成り立てる對合名詞をいふすゝはち

やまかは	山川	のやま	野山
とりけもの	鳥獸	うをむし	魚蟲
くさき	草木	かねいと	金石
ひみづ	火水	うみくが	海陸
ゆめうつゝ	夢現	てあと	手足
ふでかみ	筆紙	まきすみ	薪炭
あめつち	天地	ひつき	日月
あめかぜ	雨風	ゆきあられ	雪霰
きみおみ	君臣	ちゝはゝ	父母
めを	夫婦	おやこ	親子

あはおとゝ 兄弟
 あねいもと 姉妹
 まとこそんな男女 やつこまかだち 奴婢

の類これあり

第二目 固有對合

固有對合とは固有名詞より成り立てる對合名詞をいふ
 すかはち

日本支那 薩摩長州 人麿赤人
 伊勢貫之 佐理行成 巴 班額

の類これあり

第三目 作用對合

作用對合はと作用名詞より成り立てる對合名詞をいふ
 こは居作名詞を二つあひ對立せしめて連ね合はせたるも

のど知るべし すなはち

ゆきゝ	往來	ゆきかへり	往還
ねおき	寢起	おきふし	起臥
かちまけ	勝負	おとりまさり	劣優
うりかひ	賣買	いでいり	出入
すゝみまりぞき	進退	のぼりおり	昇降
やりとり	遣取	うけわたし	受渡
よろこひいかり	喜怒	つとめおこたり	勤惰
いきゑれ	生死	おこりさめ	發醒

の類これあり

第四目 存在對合

存在對合とは存在名詞より成り立てる對合名詞をいふ

こは居存名詞を二つあひ對立せしめて連ね合はせたるもの
と知るべし すまはち

たちね 立居

の類これあり

第五目 形状對合

形状對合とは形状名詞より成り立てる對合名詞をいふ

こは居形名詞を二つあひ對立せしめて連ね合はせたるもの
と知るべし すまはち

よしあし

善惡

ありなし

有無

ながしみじかし

長短

いたしかゆし

痛痒

の類これあり

この形状對合は語尾の省かりたるあり すまはち

たかひく

高低

まろくろ

白黒

なかたかなかくぼ

凸凹

の類これあり

第六目 象況對合

象況對合とは象況名詞より成り立てる對合名詞をいふ

こは居象名詞を二つあひ對立せしめて連ね合はせたるもの
と知るべし すまはち

かみまも

上下

うへまた

上下

ひだりみぎ

左右

まへきりへ

前後

あとさき

後先

うちと

内外

もとすゑ

本末

かかすみ

中隅

おくはし

奥端

かげひなた

陰陽

うらおもて

裏表

たてよこ

縦横

にしひがし

西東

ひるよる

晝夜

いにしへいま 古今

はるあき

春秋

第七目 人代對合

人代對合とは人代名詞より成り立てる對合名詞をいふ

すなはち

われなんぢ 吾汝

かれわれ

彼我

われかれ 我彼

きみわれ

君吾

の類これなり

第八目 指代對合

指代對合とは指代名詞より成り立てる對合名詞をいふ

すなはち

それこれ 其是

かれこれ 彼是

あれこれ 彼是

これかれ 是彼

の類これなり

第九目 疑代對合

疑代對合とは疑代名詞より成り立てる對合名詞をいふ

すなはち

たれかれ 誰彼

たれそれ 誰其

なにこれ 何是

の類これなり

第十目 汎代對合

汎代對合とは汎代名詞より成り立てる對合名詞をいふ
すなはち

ものごと 物事

の類これなり

第二款 形合名詞

形合名詞とは實名詞代名詞の別を問はず事物の形状と性質とを指定すべき形容詞を名詞の語首に連ね合はせて一意一言にいひなす合名詞をいふ。こは文章組立上形容詞を一言中よ具有せる熟語を擇ぶに文法上必要の部別ブツベと知るべし。まかうしてこの名詞はその連ね合はせたる二言の間に「の」ある」といふ辭の含まりて省かりたるものと知るべし。こは下の詞の語首が「かさたは」の四行の音なるときは濁りまた上の詞の語尾が第四音の「え列」なるときは第一音の「あ列」に轉ずるを例とす。まかれどもこの定

則にかゝはらざるもあり 精しくは附録の詞の連聲法に
ゆづる 合はせ見よ たとへば

- さくらばな は (櫻の花)
- やまがは ぼ (山の川)
- あてびと は (貫なる人)
- おほかは は (大おほかる河)
- ふなひと は 船の人
- うはかせ は 上なる風
- さむそら は (寒き空)
- むかで は (空むかじき手)

とやうにいふ意味にてその物の形容を添へ合はせて一意一物の意となる類のごとし 性質上これを類別して

- 普通形合
- 固有形合
- 作用形合
- 存在形合
- 形状形合
- 象況形合
- 人代形合
- 指代形合
- 疑代形合
- 汎代形合

の十種とす

第一目 普通形合

普通形合とは普通名詞より成り立てる形合名詞をいふ

下の詞の語首濁りたるは すなはち

- | | | | |
|------|----|------|----|
| やまがは | 山川 | のきは | 野澤 |
| ちりづか | 塵塚 | つりふね | 釣舟 |

の類これなり

上の詞の語尾轉じたるは すなはち

- | | | | |
|------|----|------|-----------------------|
| たかむら | 竹村 | かざかみ | 風上 |
| たまくら | 手枕 | ふなびと | 船人 |
| うはかせ | 上風 | あまがさ | 雨笠 |
| ひやみづ | 冷水 | あらの | 荒野 |
| こわいろ | 聲色 | すわえ | 條 <small>(末枝)</small> |

の類これなり

たゞなるは すなはち

おほかは	大河	おくやま	奥山
ひろの	廣野	さむそら	寒空
ゆふかせ	夕風	かあといも	悲妹
むなとけむり	空烟	かりや	假屋

の類これなり

第二目 固有形合

固有形合とは固有名詞より成り立てる形合名詞をいふ

すなはち

大日本	本芝區	外神田	上加茂
下越後	東群馬	西練馬	新吉原

の類これなり

第三目 作用形合

作用形合とは作用名詞より成り立てる形合名詞をいふ
すなはち

あさがすみ	朝霞	ゆふけむり	夕烟
あつごほり	厚氷	ひあふぎ	檜扇
つまごひ	妻戀	ものおもひ	物思
あふひまつり	葵祭	うひかうぶり	初冠
あかつきおき	曉起	かみづゝみ	紙包
いとだゝみ	石疊	やまとまひ	大和舞
ぼんまどり	盆踊	てからひ	手習
のあそび	野遊	のもり	野守
やまごもり	山籠	かちどり	楫取

この作用形合に語尾の省かりたるあり すかはち

ふきで	船出	たびだち	旅立
たびやどり	旅宿	かはがり	川狩
こがらし	木枯	しほひ	汐干
すくはらひ	煤拂	よありき	夜行
ひるね	晝寐	つきみ	月見
うすぐもり	薄曇	かみまうで	神詣
うたあはせ	歌合	ものまなび	物學
おらくも	白雲	おほよど	大淀
ひとやど	人宿	みじかうた	短歌
ながうた	長歌	おほねぢ	大螺旋

の類これなり

第四目 存在形合

存在形合とは存在名詞より成り立てる形合名詞をいふ
すかはち

もとをり	本居	いへか	家居
すまる	住居	どのゐ	宿直 <small>(居)</small>
くもゐ	雲居	かたゐ	片居

の類これなり

第五目 形状形合

形状形合とは形状名詞より成り立てる形合名詞をいふ
すかはち

たうがらし	唐辛	そでゐ	袖無
-------	----	-----	----

この形状形合に語尾の省かりたるあり すかはち

てうす	手薄	てがる	手輕
まどほ	間遠	まぢか	間近
はゞひろ	幅廣	つまぐろ	妻黒
ひたひぢろ	額白	すそご	裾濃

の類これあり

第六目 象況形合

象況形合とは象況名詞より成り立てる形合名詞をいふ
すなはち

めうへ	目上	めゑた	目下
かはかみ	川上	かはとも	川下
やまおく	山奥	うみはた	海端
やまもと	山本	のすゑ	野末

ふじみのみ	富士南	はらゑか	原中
-------	-----	------	----

の類これあり

第七目 人代形合

人代形合とは人代名詞より成り立てる形合名詞をいふ
すなはち

あねぎみ	姉君	おとうとぎみ	弟君
ふかぎみ	船君	やつこわれ	奴吾

の類これあり

第八目 指代形合

指代形合とは指代名詞より成り立てる形合名詞をいふ
すなはち

このところ	此所	このとき	此時
-------	----	------	----

そのころ 其頃 そのうへ 其上
 こかた 此方 そかた 其方
 の類これなり

第九目 疑代形合

疑代形合とは疑代名詞より成り立てる形合名詞をいふ
 すかはち

なにひと	何人	かにもの	何者
なにごと	何事	かんどき	何時
いつごろ	何頃	いくか	幾日
なにほど	何程	どのくらゐ	何位

の類これなり

第十目 汎代形合

汎代形合とは汎代名詞より成り立てる形合名詞をいふ
 すなはち

おほごと	大事	みそかごと	密事
まがごと	禍事	よろこびごと	悦事
たからもの	寶物	あづかりもの	預物
まろもの	代物	くせもの	曲者

の類これなり

上よ講述せし疑代對合および指代形合疑代形合の三つの
 合名詞は一般の合名詞における定則をもつて論じ難し
 二言組み立てたる中に上の代名詞に據りて詞性を判定す
 るを定則とす その理由は疑代名詞指代名詞は他の名詞
 と性質を異にし下に連ね合はする名詞にはかゝはらず上

の疑代名詞指代名詞をもつて基本とするを例とすればあ
り

第三款 尊合名詞

尊合名詞とは實名詞代名詞の別を問はずその物を尊稱す
る意を示すためにそれが語首またはその語尾に然る意の詞
を連ね合はせて一言にいひなす合名詞をいふ 組立の上
につきこれを細別して

語首尊合

語尾尊合

の二種とす

第一目 語首尊合

語首尊合とは語首に「みおん(おほん)お御^ご」の詞を連ね合

はせて尊稱する意にいひなす尊合名詞をいふ すかほか

みよ	御代	みこ	皇子
みこと	御興	みき	御酒
おんさかづき	御盃	おんふみ	御文
おんうた	御歌	おんやど	御宿
おかみ	御上	おまへ	御前
ごてん	御殿	ごそくゑ	御即位
ぎよせい	御製	ぎよぶつ	御物

の類これなり

第二目 語尾尊合

語尾尊合とは語尾に「きみうへうとぬと」のさまおきな
兄老大人先生の詞を連ね合はせて尊稱する意にいひな

す尊合名詞をいふ すかはち

ちゝぎみ

父君

はゝうへ

母上

あにうへ

兄上

なにがらうと

某大人

たれぬと

誰主

たれどの

誰殿

たれさま

誰様

なにがとおきを某翁

なにがとせんせい某先生

なにたいじん

何大人

の類これなり

第四款 衆合名詞

衆合名詞とは實名詞代名詞の別を問はずその數衆多ある
意を示すためにその語首またはその語尾に然る意の詞を
連ね合はせて一言にいひかす合名詞をいふ 組立の上に
つきこれを細別して

語首衆合

語尾衆合

の二種とす

第一目 語首衆合

語首衆合とは語首に「もろ諸各衆」の詞を連ね合はせて衆
多の意にいひかす衆合名詞をいふ すなはち

もろびと

諸人

もろて

諸手

およくん

諸君

およじ

諸事

かくこく

各國

おうじん

衆人

の類これなり

第二目 語尾衆合

語尾衆合とは語尾に「たちがたらともかどやなにか等輩

衆の詞を連ね合はせて衆多の意にいひなす衆合名詞をいふ すなはち

きみたち	君達	ひとたち	人達
そのがた	殿方	われら	吾等
かれら	彼等	まごども	男等
まかども	品等	ものなど	物等
ふでやなにか	筆等	きぐどう	器具等
わがはい	吾輩	ちやうどう	聴衆

の類これなり

第五款 疊合名詞

疊合名詞とは實名詞代名詞の別を問はず同稱の二名詞を疊み連ねて一言にいひなす合名詞をいふ 性質上これを

細別して

實名疊合

代名疊合

の二種とす

第一目 實名疊合

實名疊合とは同稱の實名詞を疊み連ねて複數の意にいひなす疊合名詞をいふ すなはち

いへく	家々	かどく	門々
こころく	心々	ときく	時々
としく	年々	ひび	日々
つきく	月々	ところく	所々
さまく	様々	いろく	色々

くさく	種々	まか	品々
すゑく	末々	はて	果々

の類これなり

第二目 代名疊合

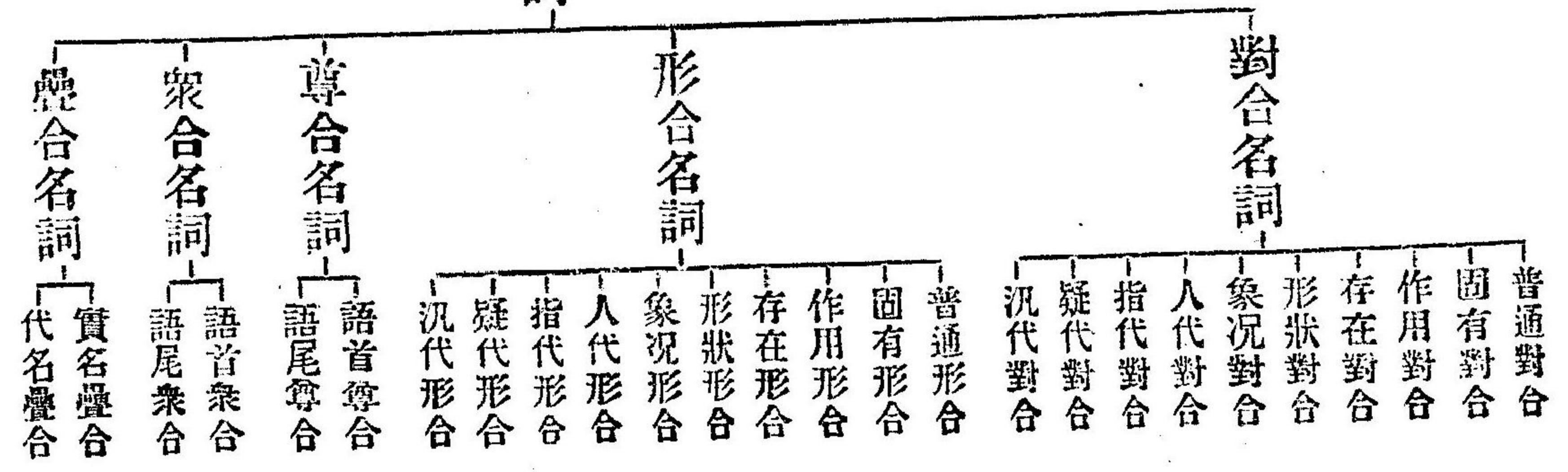
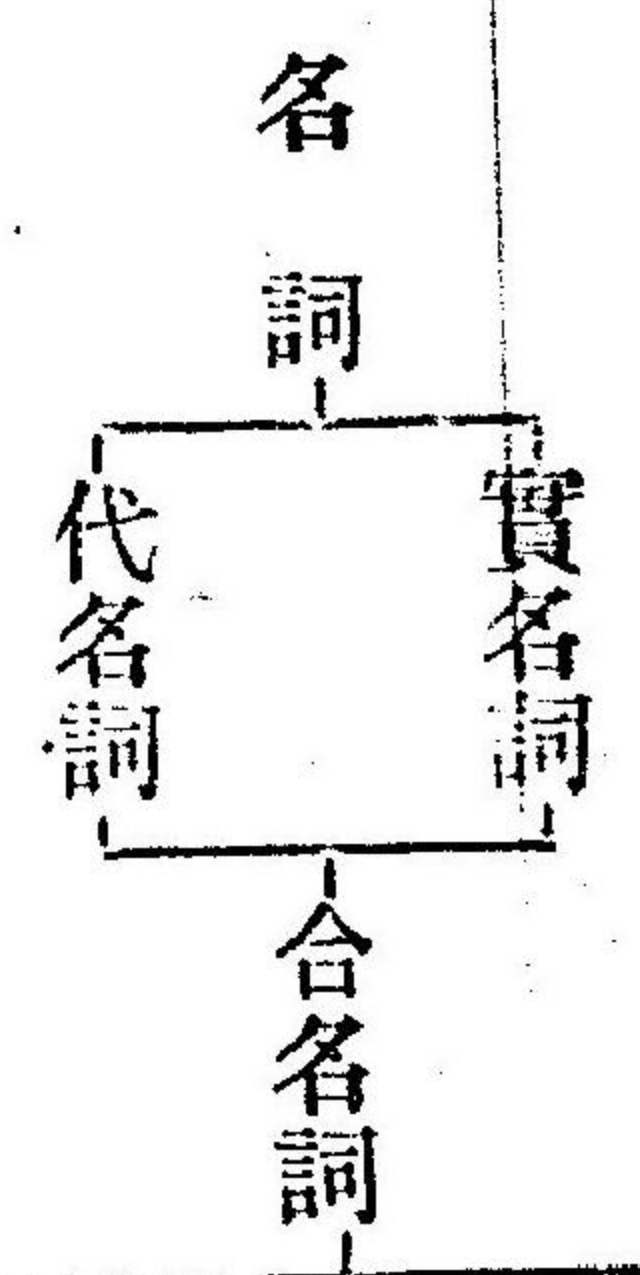
代名疊合とは同稱の代名詞を疊み連ねて複數の意よいひ
あす疊合名詞をいふ

われく	吾々	きみく	君々
これく	是々	それく	其々
かうく	斯々	たれく	誰々
いつく	何時々々	なに	何々

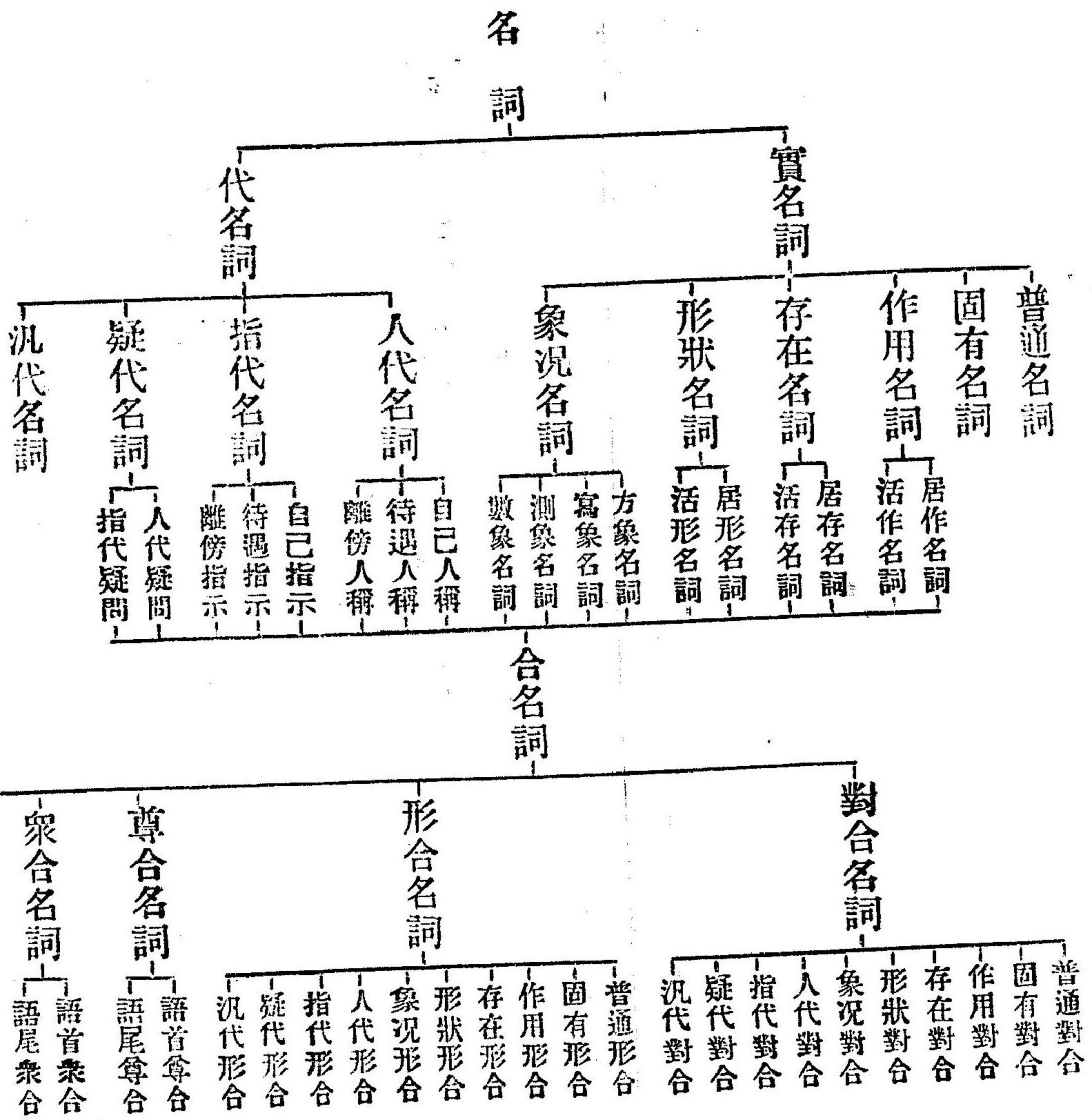
の類これあり

上に講述せし合名詞の類別を系線に表明しもつて一目瞭

然たらしめ記憶の便に供ふる左のごとし



前章各條は講述せし名詞全體の部門を統べ括りてそが大
 小類別を系線は表明しもつて一目瞭然たらしめ記憶の便
 に供ふる左のごとく



○落合直文氏は中等

日本文典に用言の

目録

作用言

形状言

の二種に類別し作用
 言の性質上における部
 目を立てて直ちに活用上
 の分類に及びせり 杜撰
 とやうはん 不規律とや
 うはん わらふんし 語
 法の學理は知らぬなるべ
 し

前章において既に名詞の部門類別につきその性質と効用
 との地位資格の差異を詳かにし作文材料の用語を擇ぶに
 便じはた文章組立法に歩を進むるの一成分を悉く講述し
 をへつ 更に歩を運び動詞の部門類別に説き及ぼしてん

第六章 動詞の類別

動詞は性質の上につきこれを類別して

作用動詞

存在動詞

形状動詞

の三種とす

第一節 作用動詞

作用動詞とは事物のうごきはたらく作用を示すに用ふる

○大和田建樹氏は和
文典に動詞の目を

自動詞

他動詞

助動詞

熟字動詞

動詞の用法

の五種とせり 不規則錯
亂的なるは言ふもさらな
り 語法の何たるを知ら
ざるもの、ことし

○物集高見氏は初學

日本文典に作用言

の目を

作用言

活辭の種類

命令法

希求法

疑問法

崇敬法

活辭の時

活辭の轉變

動詞をいふ 此は物の動き轉ずる所作また事の運用の上
をいひあらはす詞あり たどへば

人が路を往く

熊が山岸を歩む

鷺は水上を飛ぶ

鳥も空に舞ふ

毬ぞ轉ぐる

箱は蓋を開く

かどやうの「往く歩む飛ぶ舞ふ轉ぐる開く」といふ詞の類
は下の圖に示せるごとく人が脚を運び歩を進めて宅から
出で、外の方へ往き また鳥が翼を動かして地より立ち上
の方へ飛ぶを示す詞をいふ なほこの類例をたぬさん

261055

すかはち

かく	書	ふす	臥	たつ	立
あふ	逢	よむ	讀	ふる	降
きる	着	にる	似	ひる	干
みる	見	いる	射	ひきぬる	率
ける	蹴	おくる	起	おつる	落
こふる	戀	うらむる	恨	くゆる	悔
こるゝ	懲	うる	得	うくる	受
やする	瘦	すつる	捨	かぬる	兼
かふる	換	ほむる	譽	こゆる	超
かるゝ	枯	うゝる	植	すうる	居
くる	來	する	爲	たぬる	死

活辭轉變表

四段活辭

四段再轉

下二段活辭

下二段再轉

變格活辭

形狀言

形狀言の轉變

形狀言轉變表

形狀言の變化

くまゝの變化

單辭のげ

形狀變格

の二十一種とせり 錯雜

煩冗見るに足らず 更に

筋立たず部目に輕重の序

次なきもの、ことし

○那珂通世氏は用言

の目を

動作言

形狀言

補助言

の三種とせり

○中根淑氏は動詞の目

を

單用動詞

重用動詞

自動詞

他動詞

順用動詞

逆用動詞

規則動詞

不規則動詞

助動詞

分詞

の十種とせり

○關根正直氏は國語

學に活用言の目を

動詞

形容詞

助動詞

の三種とし動詞の目を

動詞の法

動詞の性

の類これあり

第二節 存在動詞

存在動詞とは事物の存在せる現象を示すに用ふる動詞を

いふ 此は物の動き轉ずること無く居坐イマスわりて在る状態

の上をいひあらはす詞なり(この存在動詞の部別はかつて明治三十二年十一月一日の出版に係る日本語學發見の中性動詞と名稱して創明したまはしきことば斯く改稱せるなり)

人が世に在る

人が家に居る

鳥は枝にとまりて在り

園のめぐりには垣が有り

林に鳥がゐる

かゞやうの在る居る在り有りあるといふ詞の類は下の圖

動詞の時

の三種とし形容詞の目

を

形容詞の法

形容詞の意趣

形容詞の類別

の三種とし助動詞の目

を

助動詞の法

助動詞の意趣

の二種とせり

○高津鞞三郎氏は日

本中文典に動詞の

目を

動詞の定義

動詞のはたらき

規則正しき動詞のは

たらき

不規則動詞のはたら

き

動詞五段の用方

動詞の時法

動詞の命令をあらは

す法

に示せるごとく脚の運び翼の働きを要せずしてたゞ一人

がその所に在り鳥があゝの所に見えて有る」といふに過ぎ

ざる意にてたゞその物の眼に觸るゝ坐象を示す詞をいふ

なほこの類例をまめさん ずなはち

はべり 侍 いますかり 御坐

ある 居 ひきぬる 率

の類これなり

第三節 形状動詞

形状動詞とは事物の形状および情態を示すに用ふる動詞

をいふ 此は形の「方圓大小」色の「黑白濃淡」情の「嬉悲苦

樂」度の「高低淺深」などの現象模様の上をいひあらはす

詞なり たとへば

自動詞・他動詞

使動詞

敬動詞

の十種とせり

○大槻文彦氏は(言滉)

中へ講述せる語法指

南に動詞の目を

動詞の性

語根、語尾、變化

規則動詞、

不規則動詞、

規則第一類

不規則第一類

動詞の法

の七種とせり、いづれも

うの性質と効用との別ま

た法と格との別更に順序

を得ず、條理立たざるも

の、ことし、また粗雑に

失せりと謂ふべし、順次

子が講述するところと對

比して是非正否を判せよ

世の識者世の愚者

熊は黒し

鷺は白し

毬は圓し

世は樂し

山は高し

海は深し

なごやうの「黒し白し圓し樂し高し深し」といふ詞の類は

下の圖に示せるごとくたゞ「この形は圓しその状は方ツカサで

あり「毛色は黒し羽は白し」とやうに眼に見ゆる事物の現

象を示す詞をいふ、なほこの類例をまめさん すなはち

あかし 赤 あをし 青

こし 濃 うすし 淡

おほきし 大 ちひさし 小

おほし 多 すくなし 少

ながし 長 みじかし 短

ひろし 廣 せまし 狭

おもし 重 かるし 輕

とほし 遠 ちかし 近

あつし 暑 さむし 寒

すずし 涼 さびし 淋

うれし 嬉 かあし 悲

のどけし 長閑 さやけし 朗

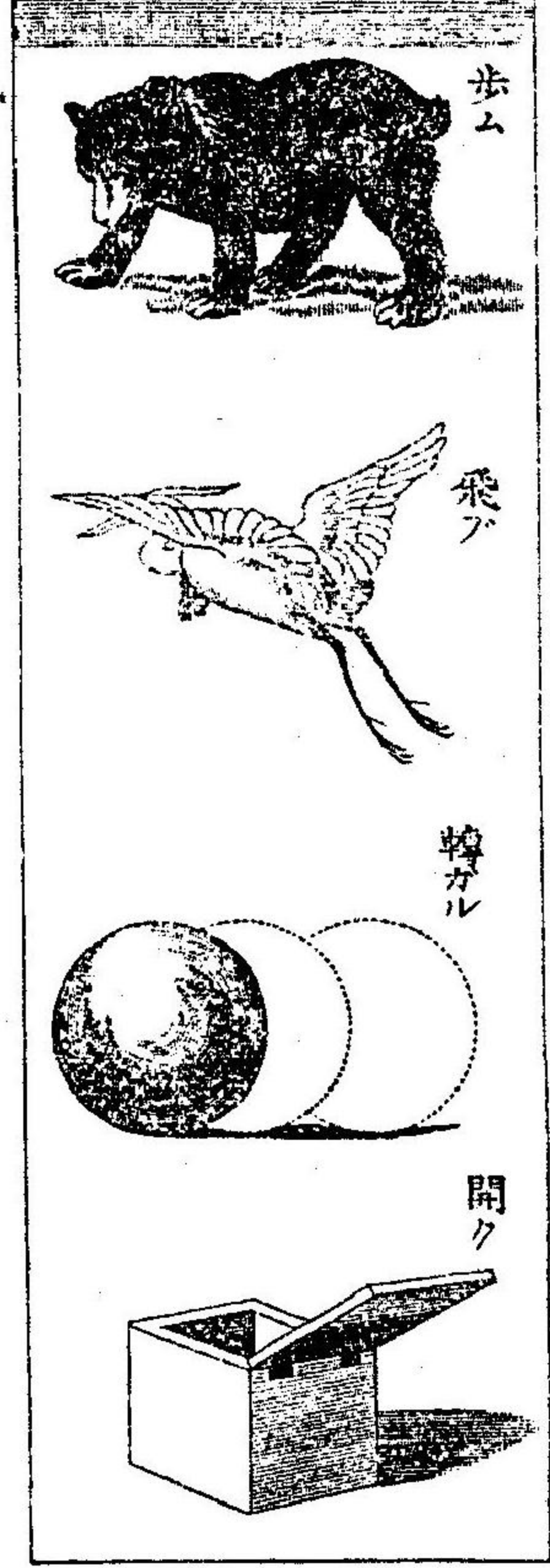
あたし 暖 はるけし 遙

よどけし 善 あとけし 惡

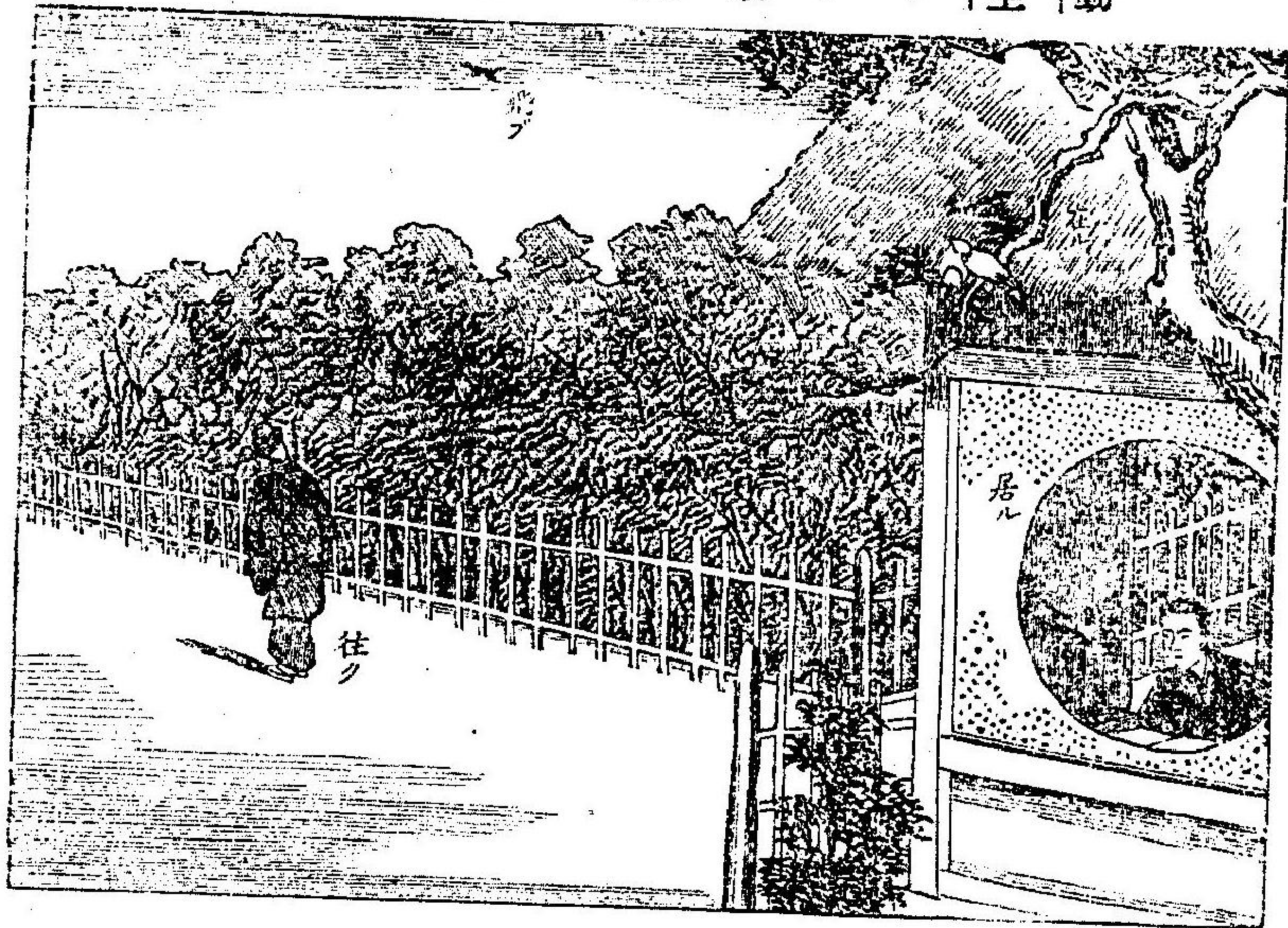
の類これあり

上に講述せる作用動詞と存在動詞と形状動詞との差異辨別をいま圖をもつて懇篤にさとせめと一目その意義を會得徹底せしむ

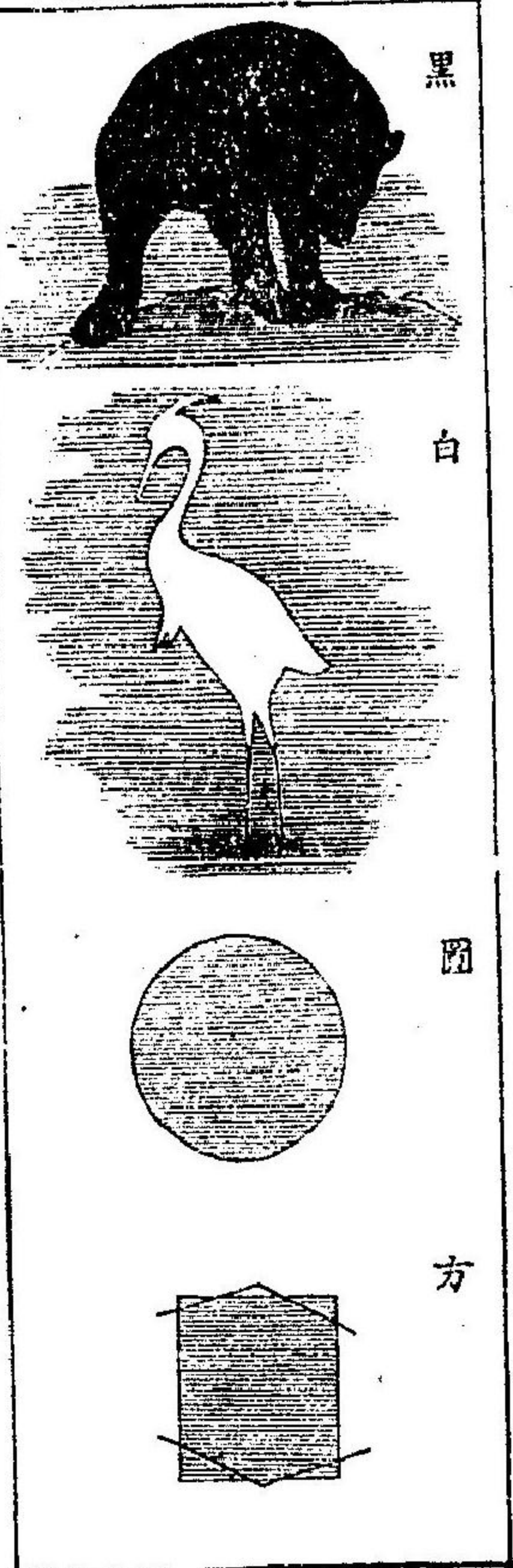
動物ノ作用上ノ言ハシテハ動詞ト示ス



物ノ動 | 作ト坐 | 象トノ | 差異ヲ | 辨シ以 | テ作用 | 動詞ト | 存在動 | 詞トノ | 別ヲ示 | ス



物眼ノ見ル象言ハス表ス状動詞
物眼ノ見ル象言ハス表ス状動詞



上に講述せる動詞の類別を系線に表明しもつて記憶の便にそなふる左のごとし

作用動詞
存在動詞
形状動詞

第四節 作用動詞の類別

作用動詞は性質の上につきこれを細別して

従来語學家は皆てこの部別をも立てずとも類臣

が啓發なれば訝かる者あるべし。こは名詞の類別部別とあひ對比しまた文法組立の上、重要の關係あり關ぐべからざる理由あれば止むを得ざるなり。こは詞の成立法上の性質を區分せるなり。自他あとの活用法上の性質とは全く別なり。思ひまがふなかれ

- 本作動詞
- 特作動詞
- 寫作動詞
- 化作動詞
- 變作動詞
- 物作動詞
- 代作動詞

第一款 本作動詞

本作動詞とは純然たる本性の作用動詞をいふ たどへば

吾は學校へ往く

花見より歸る

今朝は雨が降る

かどやうの「往く歸る降る」のごとくそのものを限らずに言ひます類これあり

第二款 特作動詞

特作動詞とは使用の上はその分際をかぎる特性の作用動詞をいふ たどへば

馬が野にいなく

鶯は嶺まかなく

天皇に奏す

后のおまへに啓す

仁徳帝は難波高津の宮に崩す

日本武の尊は能褒野に薨す

かどやうの「嘶く嚇く奏す啓す崩す薨す」のごとくそのものを限りて言ひます類これあり

第三款 寫作動詞

寫作動詞とは他に在る事物の實形を寫影してこれが現象を假用して言ひあらはすに用ふる作用動詞をいふ ことはその語尾にかからず「はみはむ」「ひぶ」「ふりぶる」「さひさぶさぶる」「めきめく」「たちだつ」「つきづく」をやうに語尾の變化すべき動詞質の一種の辭がそはりて言ひますものと知るべし たどへば

何となく景色はむ

聲いたく嗔はみて鄙ふ

かれぞ博士だちて高ぶる

この森を神さぶる

わらはべは老成びて賢したつ

花の梢はやゝ景色だつ

野も山も景色づく

立ちおふるまひを浮虚めく

けはひ色めきて戯はむ

窪めるところ水づきて池めく

なぞやうの「景色はむ暖はみ鄙ふ博士たち高ふる神さぶる老成び賢したつ景色だつ景色づく浮虚めく色めき戯はむ水づき池めく」のごとくその模様の現象をはたらかして言ひなす類これかり

第四款 化作動詞

化作動詞とは名詞および漢語洋語の語尾に「しする」とやうに語尾の變化すべき「爲る」意の動詞がそはりてその動詞に變質して化成せる一種の作用動詞をいふ たとへば

おもふどころ野邊の遊びす

あぢきなくも人を戀ひす

おもなくもゆひの耻ぢす

母は子どもを愛す

學友と文法を論ずる

非常に勉強す

かれは官途にぞ奉職する

うち集ひてトランプす

などやうの「遊ぶ」戀ひす耻ぢす愛す論ずる勉強す奉職するトランプすのごとく國語の名詞のみならず諸外國語もすべてそが語尾に「爲る」といふ動詞をそへあはせたりせは動詞に變質して化しはたらく類これなり

第五款 變作動詞

變作動詞とは名詞および漢語の語尾が變化し動詞の格に變體せる一種の作用動詞をいふ たとへば

世を政事ちて民をめぐむ

天の下を政事つ

綾の衣さうぞきてぞ出づる

よき衣着せて装束く

雉子をれうりてまらうぞにすむ

鯉のあつものを料理る
などやうの「政事」政事つぞうぞき装束くれうり料理るのごとく名詞および漢語の語尾を動詞體に變化して用ひなす類これなり

第六款 物作動詞

物作動詞とは作用動詞の語首に實名詞がそはりて物體の動作を示す作用動詞をいふ たとへば

この箱は蟲食む

關は夕暮に戸鎖す

神のみまへに額突く

雌鷄は雛を羽哺む

絲を手繰る

花を^カ手折^マり紅葉を^カ頭挿^マす
 人のほ^カを心^マえて名^ナ告^ルる
 生徒の學力^{ガク}を心^マ視^ルる
 われぞ幼主^{コシユ}を後^{アト}見^ルる
 人を垣^{カキ}間^マむ
 彼は人^{ヒト}よ背^セ向^クく
 もはや池^{イケ}の葦^{アシ}が角^{ツノ}組^ムむ
 かどやうの「蟲食^{ムシク}む戸鎖^{カド}す額突^{カド}く羽^ハ喃^ムむ手^テ繰^ルく手折^マり頭
 挿^マす心^{ココロ}え名^ナ告^ルる心^{ココロ}視^ルる後^{アト}見^ルる垣^{カキ}間^マむ背^セ向^クく角^{ツノ}組^ム」のこ
 どく物體^{モノ}に根^ネざし基^キづきてその動作^{サツ}を言^イひ表^アはす類^ルこれ
 あり

第七款 代作動詞

代作動詞とは汎代名詞の語尾に「しする」「とりとる」「どや
 うに語尾の變化すべき」爲る「意の動詞がそはりて汎く各
 種の動詞に代用する作用動詞をいふ たどへは

歌を一首ものす

暇を得てぞ物する

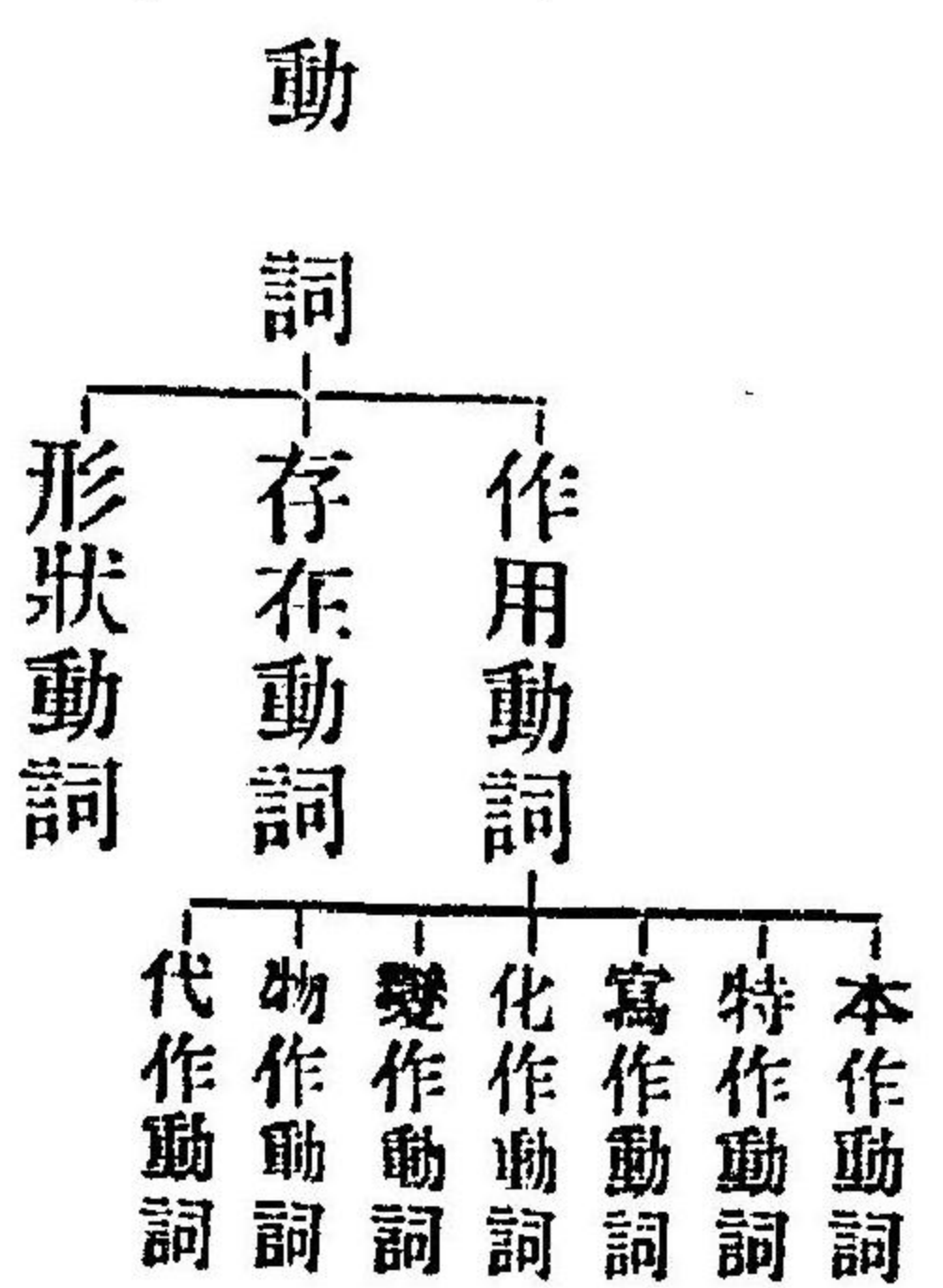
その事をまつものと彼の事はのちにもせん

世に事とりて寸暇を得ず

われ一人して事とる

かどやうの「ものす物するものともせん事とり事とる」
 のごとく汎く各種の動詞に代はる類これあり

上に講述せし作用動詞の類別を系線は表明ともつて一目
 瞭然たらしめ記憶の便に供ふる左のごとし



第五節 存在動詞の類別

存在動詞は性質の上につきこれを細別して

本存動詞

混存動詞

の二種とす

第一款 本存動詞

本存動詞とは純然たる本性の存在動詞をいふ たとへば

吾は民間に在り

神はかからず有り

心の快樂は勉學にぞ有る

あどやうの在り有り有ることく形状動詞の「無」といふ詞とあひ對して「有無」と熟語すべき象性のみと言ひます類これあり

第二款 混存動詞

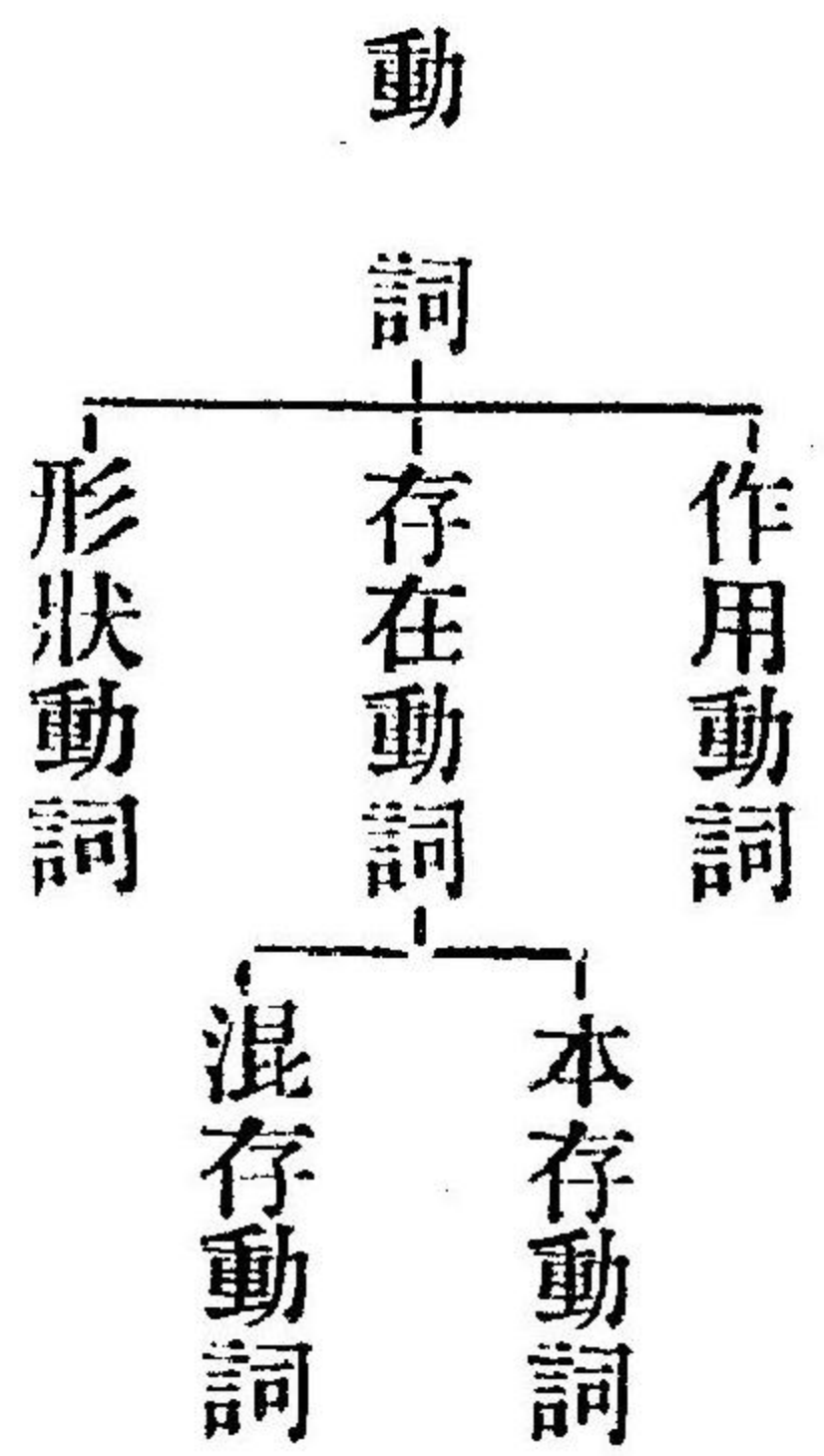
混存動詞とは作用動詞と本性の存在動詞と混成せる存在動詞をいふ

吾は書室に居り

熊は山の奥にぞ居る

鶯は野澤に居る

などやうの「居り居る居る」のごとく作用を兼ねたる存在の動詞これなり
 上に講述せる存在動詞の類別を系線に表明しもつて一目瞭然たらしめ記憶の便に供ふる左のごとし



第六節 形状動詞の類別

形状動詞は性質の上につきこれを細別して

- 本形動詞
- 寫形動詞

存形動詞

の三種とす

第一款 本形動詞

本形動詞とは純然たる本性の形状動詞をいふ たどへば

- 毬は圓し
- 鷺の嘴は長し
- 熊の毛ぞ黒く強き
- 山の峯ぞ高く峻し
- 野末は遠し
- 夏の夕風は涼し
- 秋のゆふべぞ淋し
- などやうの「圓し長し黒く強き高く峻し遠し涼し淋し

この寫形動詞も兼臣が啓發なれば訝かる人あるべけれ「じきく」「しじきく」の形狀動詞とは全く同一視すべからざる特性を有する詞なり、よく味ふべし例證は附録に出だすを待ちて見よかいなでの語學家撰りにもとくなかれ

「き」のごとく語尾の「じきく」「しじきく」とやうに變化すべき類これあり

第二款 寫形動詞

寫形動詞とは他の名詞動詞および本性の形狀動詞の意味を寫影しこれが現象に假用して言ひあらはすに用ふる形狀動詞をいふ、こはその語尾に「けしけくひき」とやうに語尾の變化すべき形狀性の一種の詞がそはりて言ひをすものと知るべし

春の日影は暖けし

空も長閑けく日の色も麗けし

月の影を朗けき

朝風を寒けき

彼が行状はかか〜善けし

國體を忘るゝを惡しけき

なごやうの「暖けし長閑けく麗けし朗けき寒けき善けし

惡しけき」のごとく語尾の「けしけきひくしけしけきし

けく」とやうに變化すべき類これあり

第三款 存形動詞

存形動詞とは本形動詞寫形動詞の語尾に存在動詞の「有り」の詞がそはりて存在性に言ひなす一種の形狀動詞をいふ、成立の上につきこれを細別して

本象存形

寫象存形

の二種とす

この存形動詞も兼臣が部目を立て、學びかたの順序を秩然たらしめたり、從來の語學書なるはなべて漠然として更に秩序をなせるは無し

第一目 本象存形

本象存形とは本形動詞の語尾なる「く」と「より」存在動詞の「有り」の詞が添はりてその語尾の「く」と「有り」の「あ」とあひ合へるが「くあ」とあるを反切法にて「か」と約まりまた「とくも有り」の「あ」とあひ合へるが「とくあ」となるを「とか」と約まりまた「けくも有り」の「あ」とあひ合へるが「けくあ」とあるを「けか」と約まり存在性に言ひます存形動詞をいふ すまはち

さむから は (寒くあら)

さびとかり は (淋しくあり)

さやけかる は (朗けくある)

とやうにいふ意味にてそが「くあら」「とくあり」「けくある」

が約まりて「から」「とかり」「けかる」とありて一言にいひなす類をいふ たとへは

風は寒かり

井の水ぞ清かる

夕暮は淋しかり

雷ぞ劇しかる

月も朗けかり

雪の朝ぞ寒けかる

かどやうの「寒かり清かる淋しかり劇しかる朗けかり寒けかる」のごとく「かりかる」とかりとかるけかりけかる」とやうに變化すべき類これなり

第二目 寫象存形

この寫象存形も、裏臣が啓發より部目を立て、上の本象存形とあひ對比し秩序をなせり

寫象存形とは本形動詞の語尾なる「しきく」または「しゝ」
「まじく」の「しきく」の省かりて「氣」といふ詞を組み合はせ
るが「け」と「有り」の「あ」とあひ合へるが「げあ」となるを反切
法にて「が」と約まり存在性に言ひかす存形動詞をいふ
すあはち

さむがら は (寒げあら)

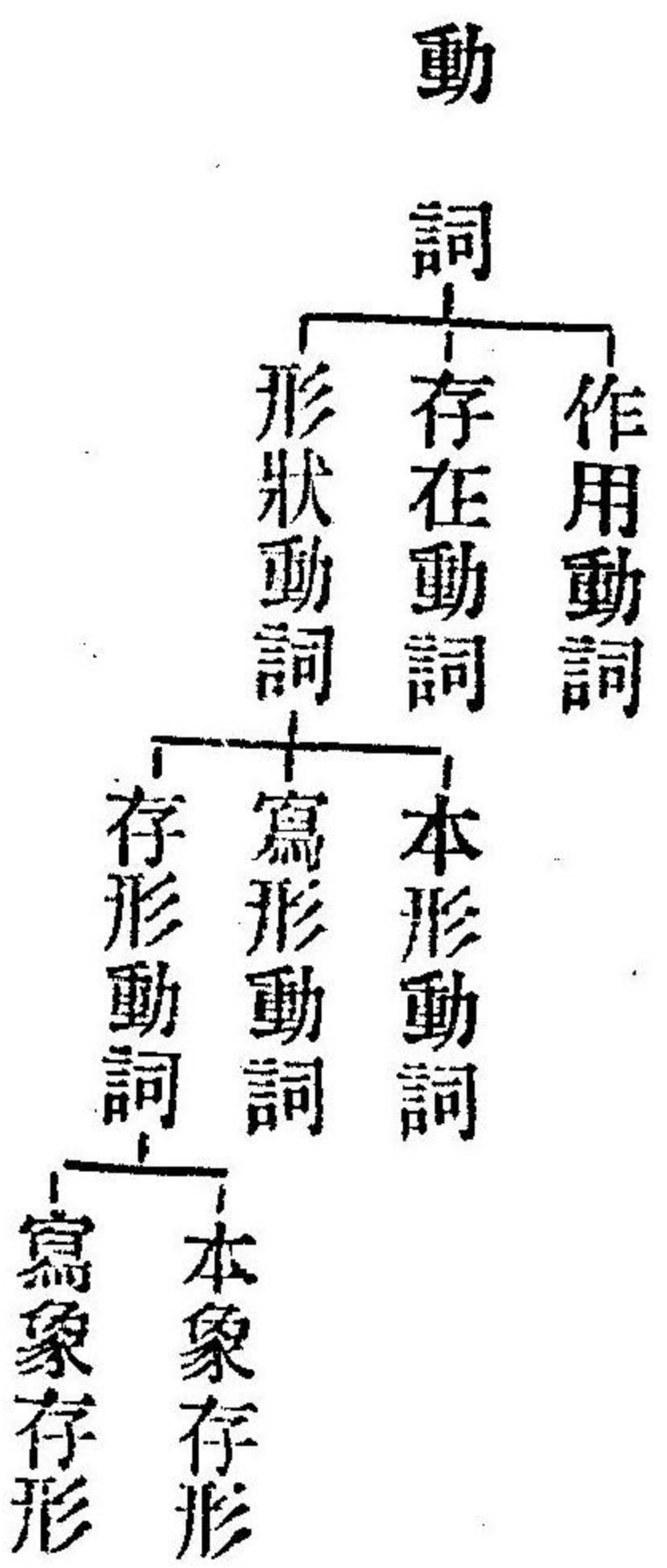
さびしがり は (淋しがあり)

うれしがる は (嬉しがある)

とやうにいふ意味にてそが「げあら」「けあり」「げある」「が約
まりて」「がら」「がり」「がる」とがりて一言にいひなす類をい
ふ たどへは

猫の子は寒がりて日向ひなたをもとむ

幼き兒は淋しがりて泣く
母は子をかほゆがる
試験に及第して嬉しがる
落第せる生徒は悔やしがる
かどやうの「寒がり淋しがりかほゆがる嬉しがる悔やし
がる」の類これあり
上に講述せる形状動詞の類別を系線に表明しもつて一目
瞭然たらしめ記憶の便に供ふる左のごとし



前章各條においてすでに作用動詞存在動詞形状動詞中の成立効用性質およびその大小類別をことごとく詳かにせり。更に歩を進めてそが作用動詞存在動詞形状動詞の各種をこれかれ二言づゝ連ね合はせて一言にいひかす法則を講述せん

第七節 合動詞

合動詞とは作用動詞存在動詞形状動詞の別を問はず二動詞連ね合はせて一言にいひなす合成の動詞をいふ。こはかあらず上下二詞とも動詞をもてあひ連ね合はするを定義とす。ゆゑに動詞の語首に各詞を連ね合はせたるは合動詞にはあらず物作動詞と心得べし。そは二言連ね合はせたるもその意義まつたく単一体のものよて複合体に

この合動詞の部門を設けて定義を立てたるも、**聖臣**が啓蒙してそが類別を
反合動詞
副合動詞
敬合動詞
重合動詞
の四種に別かてることなきは從來なべての語學書にも近時新刊の文典類も皆て無きことなれば訝る人

あらざればあり

たゞと動詞よこの合動詞あるは名詞に合名詞ありまたこの活用基法に合活基法あるに對しての部別を知るべし
性質の上につきこれを類別して

- 反合動詞
- 副合動詞
- 敬合動詞
- 重合動詞

の四種とす

第一款 反合動詞

反合動詞とは作用動詞存在動詞形状動詞の別を問はずそ

もあるべけれど名詞よ合名詞あるよ對しての性質と効用とを比準せば斯く部別せざるを得ざるなり。またその部別を性質よより對照するに名詞よは對合といへるを動詞には反合といひ形合といへるを副合と稱し聲合といへるを敬合と稱し聲合といへるを重合と稱せることばけだし止むを得ざるなり。そは名詞の体性のもとの動詞の用性のもとは自然効用の上に差異あるをもつてなり。たとへば文章組立の上よ名詞よそはるを形容詞といひ動詞よそはるを副動詞といへる例の如し。學者苦心熟慮して味ひて

こは名詞よ對合名詞あるに對しての部別を知るべし例證は附録に委し

の意味あひ反對すべき性質の動詞を二つ連ね合はせて二意一言にいひなす合動詞をいふ。こは文章組立上あひ反對する動詞の熟語を擇ぶ、文法上必要の部別を知るべし。おかしめてこの動詞はその連ね合はせたる一言の間に「またはあるひは」といふ辭の合まりて省かりたるものと心得べし。たとへば

- あきかへる は (往きまたは還る)
 - ありのぼる は (降りまたは昇る)
 - いでいる は (出でまたは入る)
 - ちりちらす は (散りあるひは散らす)
 - たちねる は (立ちあるひは居る)
- とやうにいふ意味にてあひ反する二様の意となるを連ね

合はせて一言にいひなす類のごとし。性質の上につきこれに細別して

- 作用反合
- 存在反合
- 形状反合

第一目 作用反合

作用反合とは作用動詞より成り立てる反合動詞をいふすなはち

- 往き還る 降り昇る 出で入る
- 起き臥す 受け渡す 送り迎ふる
- 喜ひ怒る 問ひ答ふる 明け暮る、

例證は附録に委し

思ひ思はず 散りや散らずや 知る知らぬ
の類これあり

第二目 存在反合

存在反合とは存在動詞より成り立てる反合動詞をいふ
すなはち

立ち居る 在り在らず 有るか有らぬか
の類これあり

第三目 形状反合

形状反合とは形状動詞より成り立てる反合動詞をいふ
すなはち

善しや惡しや 有りや無しや 有るか無きか
の類これあり

こは名辭に形合名詞あるに
對しての部別を知るべし

第二款 副合動詞

副合動詞とは作用動詞存在動詞形状動詞の別を問はず物
の動作運用の模様情態を指定すべき副詞を動詞の語首に
連ね合はせて一意一言にいひなす合動詞をいふ 此は文
章組立上副詞を一言中に具有せる熟語を擇ぶに文法上必
要の部別を知るべし 志かしてこの動詞はその連ね合は
せたる二言の間「てつゝ」といふ辭の含まりて省かりた
るものと心得べし たどへば

ゆきあふ は (往きて逢ふ)
ゆきとまる は (往きて止まる)
かへりくる は (歸りて來る)
たちかへる は (立ちつゝ歸る)

例證は附録に委し

おひかくるは は (追ひつゝ、駈くる)
 まちをる は (待ちつゝ、居る)
 とやうにいふ意味にてその動作の模様を副^タけそへて一意
 一様の意とある類のごとし 性質の上につきこれを細別
 して

作用副合

存在副合

形状副合

の三種とす

第一目 作用副合

作用副合とは作用動詞より成り立てる副合動詞をいふ

この作用副合はその語首に作用動詞を組み合はせたるあ

例證は附録に委し

り 存在動詞を組み合はせたるあり 形状動詞を組み合
 はせたるあり たゞし形状動詞はその語尾の「く」と「が」
 省かるを例とす 語首に作用動詞を組み合はせたるは
 すかはち

往き逢ふ

往き止まる

歸り來る

立ち歸る

追ひ駈くる

起き上がる

問ひ合はする

待ち兼ねる

戀ひ詫ぶる

書き初むる

讀み終はる

教へ授くる

笑み榮ゆる

泣き悲しむ

聞き届くる

見渡す

受け取る

招き寄する

の類これなり

語首に存在動詞を組み合はせたるは すかはち

有り合はする 在り觸るゝ 在り詫ぶる
 居り兼ぬる 居着く 居坐わる
 の類これなり

語首に形状動詞を組み合はせたるは すなはち

長引く 細引く 近着く

近寄る 遠離る 甘垂るゝ

の類これなり

第二目 存在副合

存在副合とは存在動詞より成り立てる副合動詞をいふ
 この存在副合もその語首に作用動詞を組み合はせたるあり
 存在動詞を組み合はせたるあり 形状動詞を組み合はせたるあり
 たゞし形状動詞はその語尾が「がり」に轉

例證は附録ニ委し

じて連ふるを例とす

語首に作用動詞を組み合はせたるは すなはち

潛み在る 罷り在る 待ち居る

見居る 下り居る 引き居る

の類これなり

語首に存在動詞を組み合はせたるは すなはち

有り居る 在り居る 居居る

の類これなり

語首に形状動詞を組み合はせたるは すなはち

寒がり居る 憎がり居る 悔やしがり居る

の類これなり

第三目 形状副合

形状副合とは形状動詞より成り立てる副合動詞をいふ
この形状副合もその語首に作用動詞を組み合はせたるあり
存在動詞を組み合はせたるあり 形状動詞を組み合
はせたるあり

語首に作用動詞を組み合はせたるは すまはち

聞き憎き 聞き能き 見能き

書き能き 読み憎き 見苦しき

の類これあり

語首に存在動詞を組み合はせたるは すまはち

在り憎き 居り能き 居強面き

の類これあり

語首に形状動詞を組み合はせたるは すまはち

例證はすべて附録に委し

赤黒き	淺黒き	薄赤き
薄暗き	細長き	重苦しき

の類これなり

第三款 敬合動詞

敬合動詞とは作用動詞存在動詞形状動詞の別を問はず人
を尊敬すべき敬語を動詞の語尾に連ね合はせて一言にい
ひかす合動詞をいふ 此は文章組立上敬語を一言中に具
有せる熟語を擇ぶに文法上必要の部別と知るべし

たゞと敬語は神と天皇との上につかひかす外はたゞ對
話と消息文との上でのみ用ひかすを例ととみだりにつ
かふまじきものと心得べし

成立の上よつきこれを細別して

此は名詞に各合名詞あるよ
對しての部別と知るべし

本性敬合

副性敬合

の二種とす

第一目 本性敬合

本性敬合とは作用動詞存在動詞形状動詞の別を問はずその語尾に「さ行四段」とす「と行下二」せすする「とせとす」とする「またはま行下二」とめじむとむる「またはら行下二」れるるる「られらるるる」「と行ら行合活下二」せられせらるせらるる「とせられせらるる」とせらるる「ま行ら行合活下二」とめられとめらるとめらるる」
「さ行四段」行下二「ま行下二」行下二「と行」行合活下二「ま行」行合活下二の解
 とやうに語尾の變化すべき「令する被る」の詞を連ね合

例證はすべて附録に委し

はせて敬語に言ひかす敬合動詞をいふ

たゞしこの本性敬合はその語尾に「令する」被る」といふ詞を組み立て、敬語に言ひかす理由は「貴人は用を辨するに事を人して令せ下人は貴人に壓制を受けて事を被る」を尊卑の道とすればその意を表せるものと、

心得べし

「さ行四段」あるは すかはち

立たず

執らず

佩かず

知らず

布かず

踏ます

通はず

誦はず

爲す

の類これあり

「と行下二」あるは すかはち

持たする 待たする 遊はする
 起きさせる 見させる 爲させる
 居らせる 居させる 悔やとがらせる
 の類これあり
 ま行下二なるは すなはち
 書かとむる 讀まとむる 踏まとむる
 恨みとむる 譽めとむる 超えとむる
 有らとむる 牽居しむる 嬉しがらとむる
 の類これあり
 ら行下二なるは すなはち
 召さるゝ 思さるゝ 立たるゝ
 悔いらるゝ 出でらるゝ 爲らるゝ

在らるゝ 居らるゝ 惜とがらるゝ
 の類これなり
 さ行ら行合活下二なるは すなはち
 受けさせらるゝ 起きさせらるゝ 爲させらるゝ
 の類これなり
 ま行ら行合活下二あるは すなはち
 書かとめらるゝ 讀まとめらるゝ 爲とめらるゝ
 の類これなり
 第二目 副性敬合
 副性敬合とは作用動詞存在動詞形状動詞の別を問はずそ
 の語尾に「給ひたまふ給はせたまはするたうべたうぶ給
 へたまふるましますまいまします在とまします御座

例證は附録ニ委シ

せおはする御坐しましおはします奉りたてまつる侍りは
 べる候ひさぶらふのごとく語尾の變化すべき動詞性の
 敬詞を副へ連ねて敬語に言ひおす敬合動詞をいふ
 たゞしこの副性敬合はたゞその語尾に副へ加ふる敬詞
 によりて敬意を表はすのみにて本語には更に變化をお
 よぼさざるものと知るべし
 すなはち

書きたまふ	讀みたまふ	見たまふ
聞きたまはする	起きたまはする	譽めたまはする
告たうぶ	問ひたうぶ	恨みたうぶ
思ひたまふる	参りたまふる	告げたまふる
往きます	渡ります	歸ります

渡りいます	昇りいます	下りいます
慎まりまします	出でまします	入りまします
遊びおはする	聞きおはする	知りおはする
眺めおはします	待られおはします	忍びおはします
思ひたてまつる	見たてまつる	爲したてまつる
罷りはべる	爲はべる	惜しがりはべる
畏りさぶらふ	存じさぶらふ	伺ひさうらふ

の類これあり

第四款 重合動詞

重合動詞とは作用動詞存在動詞形状動詞の別を問はず同
 稱の二動詞を重ね連ねてその意味を重く強むる意に言ひ
 なす合名詞をいふ 性質の上につきこれを細別して

こは名詞に疊合名詞あるに
對しての部別を知るべし

緩性重合

急性重合

の二種とす

第一目 緩性重合

緩性重合とは作用動詞存在動詞形状動詞の別を問はず同稱二動詞の間に「に」の辭を挿まらずして重ね言ふ緩性の重合動詞をいふ すまはち

- | | | |
|----------------------|------------------------|--------------------------|
| 往くく | ゆきく | 返すく |
| 恐るく | 怕 <small>おそ</small> づく | 顛 <small>たふ</small> ふく |
| 言ふく | いひく | 悔ゆく |
| く <small>く</small> く | 泣くく | さ <small>さ</small> きく |
| 在るく | ありく | 喜 <small>よろこ</small> ぶるく |

例證は附録に委し

の類これあり

第二目 急性重合

急性重合とは作用動詞存在動詞形状動詞の別を問はず同稱二動詞の間に「に」の辭を挿みて重ね言ふ急性の重合動詞をいふ すまはち

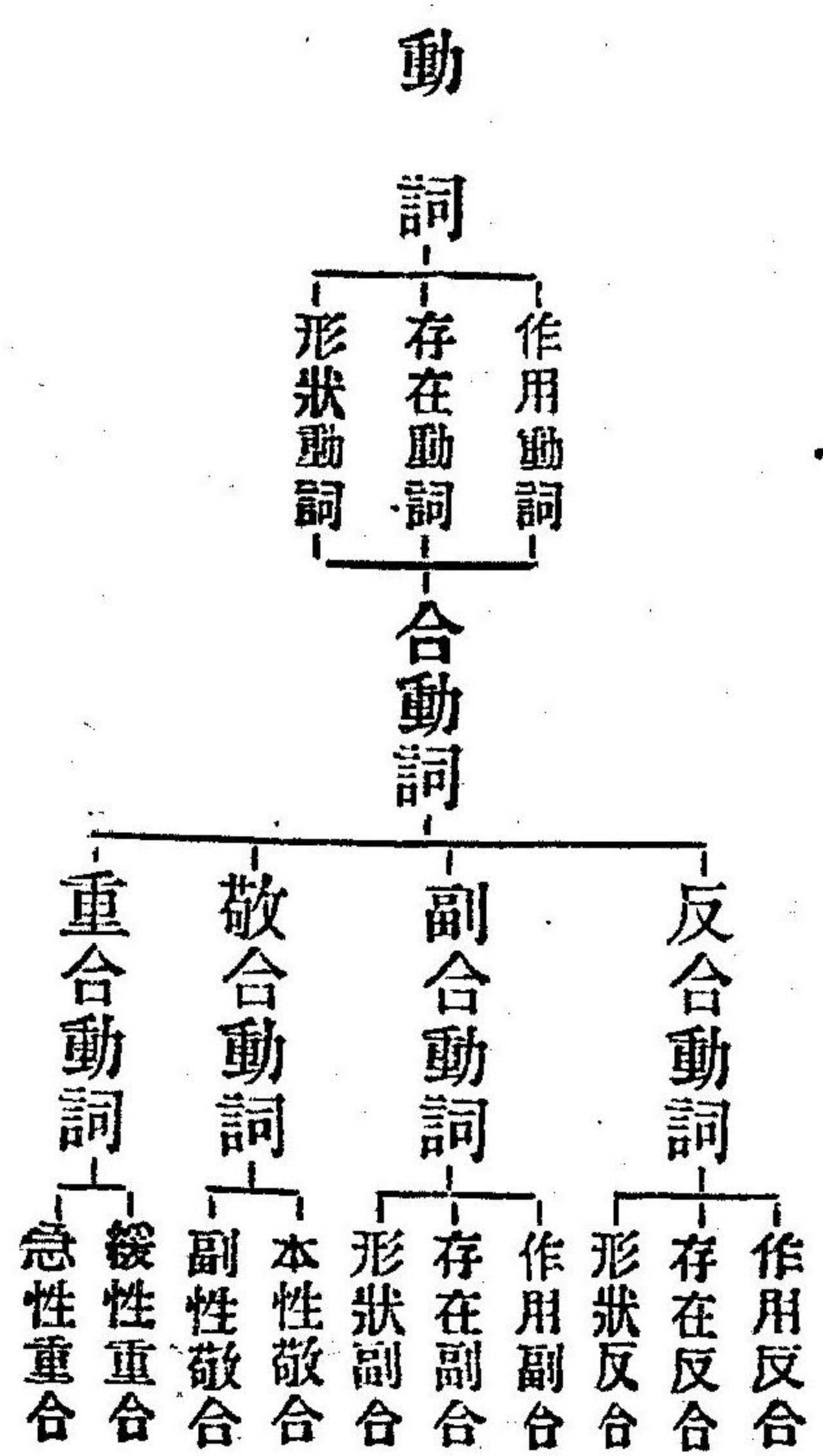
- | | | |
|-------------------------|---------------------------|-----------------------------|
| 往きにゆく | 往きにゆき | 返 <small>かへ</small> す |
| 恐れにおそる | 怕 <small>おそ</small> ぢにおづる | 顛 <small>たふ</small> ひにふるふ |
| 言ひにいふ | 言ひにいひ | 悔 <small>く</small> いにくゆる |
| 悔 <small>く</small> いにくい | 泣 <small>な</small> きになく | 泣 <small>な</small> きになき |
| 在りにある | 在りにあり | 喜 <small>よろこ</small> ぶりによがる |

の類これあり

上に講述せる合動詞の類別を系線に表明ともつて一目瞭

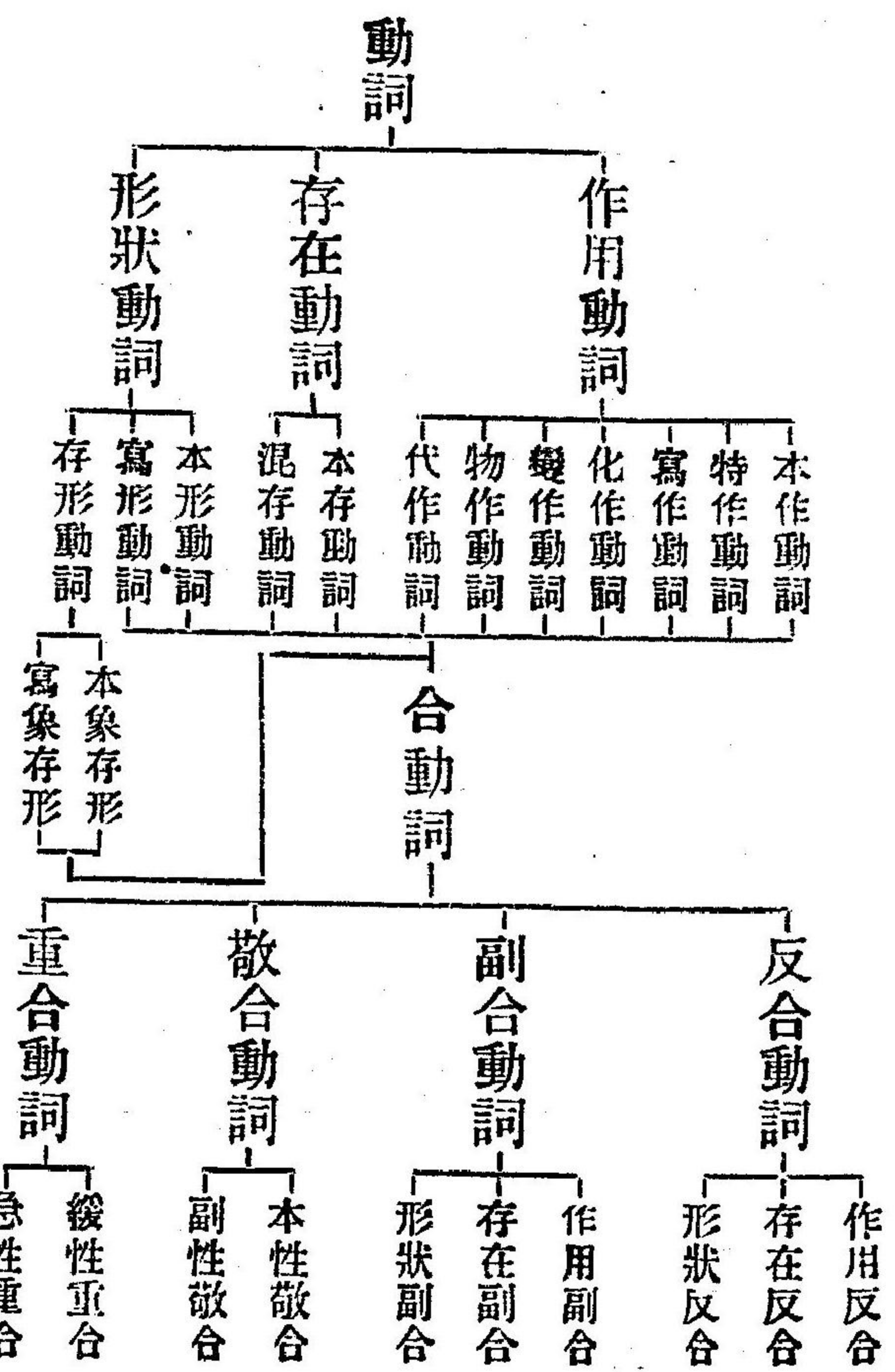
例證は附録に委し

然らしめ記憶の便に供ふる左のごとし



前章各條に講述せし動詞全體の部門を統へ括りてそが大
小類別を系線に表明しもつて一目瞭然たらしめ記憶の便
に供ふる左のごとし

前章において既に動詞の部門類別につきその性質と効用
との意趣摸様の差異を詳かにし作文材料の用語を擇ぶに
便じはた文章組立法に歩を進むるの一成分を動詞の上に



從來語學家がたゞ動詞語尾の變化のみよて綴辭すなほち「て」をば「添はらざる活き」を用法として論ぜるは「いみじき」ひがことなり。そは何となれば「綴辭」は「添はらざる活き」の變化はたゞ僅かにその活用基礎をなせるに過ぎざるものなればなり。ゆゑに動詞の意味を言ひ表はすに足らざる不完全のものなれば「用法」と稱すべからざる。然らば「活用基礎」といふは當然にはありける。されば完全の動詞

つき悉く講述しをへつ。然るに動詞は語尾の變化によりて時の「過現未」と語尾の「斷續」とに格例ある活用基法の特性を具有せるをもて次に動詞活用基法に説き及ぼしてん

第八節 動詞の活用基法

動詞活用基法とは本邦固有發音の原理に基づき五十音圖の縦行横列の首位系統の準則して語尾を數様に變化し一詞にしてよく時の機轉を辨じ百般の活事活物に應用すべき一定の基礎をさため後文章門に至り結尾靈辭とあひ須ちて動詞活用の意味を完全につくすべき方法の楷梯準備として學ぶ課程をいふ。活用品種の上につきこれを類別して

作用活基法

存在活基法

形状活基法

の三種とす

第一款 作用活基法

作用活基法とは作用動詞に屬する語尾變化の格をいふ格例の上につきこれを細別して

四段活格

上一段活

下一段活

上二段活

下二段活

|| 下行一格

活用法たるものはその語尾に添はる綴辭とあひ須ちて格別に意味をつくすに足るべき文章論すなほち詞の結合法の範圍内において論ずべきものありざるを從來世上に在り隔れたる語學書および近時新刊の文典類を驗するに「つだに斯くのごとく教授法に叶ひて秩序を立てたるは無し。ゆゑよ綴辭が舊式を廢し新式を開發的に漸進せざるを得ざるはけだし止む能はざるあり。自今もこれに類せるもの世に出づるあらば全く予が啓蒙創明に係られるこの開發新式にならひたるものと證明して天下に公言すべからざるを得ざるなり。また形容詞副詞を論辭論すなほち詞の成立法中より引き離ちて文章論すなほち詞の

結合法中に編入せしむ
古未發の一新發明なり
その理由は下の文章
門において詳密に辨明す
べし

さ行一格

な行一格

の八種とす

第一目 四段活格

四段活格とは五十音圖中「あいうえ」の四列すきはち四段にわたりて活くものをいふ いま往く臥すといふ二動詞につきて説き明かさんにはたとへば

往くは ゆか ゆき ゆく ゆけ
臥すは ふさ ふむ ふす ふせ

とやうにその語尾四段に係かりて活く格これあり たゞ「かさたはまら」の六行ともこれに活けり すきはち左の圖式のごとし

あ行	か行	さ行	た行	な行	は行	ま行	や行	ら行	わ行
あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ
い	き	し	ち	に	ひ	み	び	り	ゐ
う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ
お	こ	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ	を
あ行ハ四段ノ活ナシ				な行ハ四段ノ活ナシ			や行ハ四段ノ活ナシ		わ行ハ四段ノ活ナシ

第二目 上二段活

上二段活とは五十音圖中「し」の一行すきはち上位の一段に「るれ」のそはりて活くものをいふ いま着る似るといふ二動詞につきて説き明かさんにはたとへば

着る は ききる きれ
似る は にる くれ

とやうにその語尾が上位の一段に係かりて活く格これあり

たゞし「かなはまや」の五行ともこれに活けり すなはち左の圖式のごとし

- 列あ
- 列い
- 列う
- 列え
- 列お

この上二段活の中わ行の「あ」より「お」までをきたる理由はこの「居る」といふ詞の性質作用性にあらず存在性なるをもつて引き離ちて存在活基法の部門に編入せり 語るなかれ

あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お
あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お
あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お
あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お
あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お

あ行ハ上二段ノ活ナシ
さ行ハ上二段ノ活ナシ
下ナベテコレニ推セヨ

第三目 下二段活

下一段活とは五十音圖中「え」の二列すきはち下位の一段に「るれ」のそはりて活くものをいふ いま蹴る殛るといふ二動詞につきて説き明かさんに たとへば

蹴る は け ける けれ
殛る は ね ねる ねれ

とやうにその語尾下位の一段に係かりて活く格これなり たゞし「かあは」の三行ともこれに活けり すなはち左の圖式のごとし

あ 列あ
あ 列い
い 列う
う 列え
え 列お
お 列か
か 列き
き 列く
く 列け
け 列こ

第四目 上二段活

上二段活とは五十音圖中「う」の二列すなはち上位の二段にわたり「るれ」のそはりて活くものをいふ いま起く

さ 行 さ
た 行 た
あ 行 あ
は 行 は
ま 行 ま
や 行 や
ら 行 ら
わ 行 わ
し 列 し
ち 列 ち
に 列 に
ひ 列 ひ
み 列 み
び 列 び
り 列 り
わ 列 わ
す 列 す
つ 列 つ
ぬ 列 ぬ
ふ 列 ふ
む 列 む
ゆる 列 ろ
ぜ 列 ぜ
て 列 て
ねる 列 ね
へる 列 へ
め 列 め
え 列 え
れ 列 れ
ろ 列 ろ
そ 列 そ
の 列 の
ほ 列 ほ
も 列 も
よ 列 よ
を 列 を

は 掘するといふ二動詞につきて説き明かさんには たどへ

起くるは おき おく おくる おくれ
掘するは こと こそす こそする こそすれ

どやうにその語尾上位の二段に係かりて活く格これあり
たゞし「かさはまやら」の七行どもにこれに活けり
すかはち左の圖式のごとし

さ	か	あ	あ	あ
行	行	行	列	列
掘	起	あ	列	列
さ	か	あ	列	列
し	き	い	列	列
す	く	う	列	列
れ	れ	え	列	列
せ	け	え	列	列
そ	こ	お	列	列

た	な	は	ま	や	ら	わ
行	行	行	行	行	行	行
落	戀	恨	老	舊	わ	
た	は	ま	や	ら	わ	
ち	に	み	い	り	あ	
つ	ぬ	む	ゆ	る	づ	
て	ね	め	え	れ	ゑ	
ど	の	も	よ	ろ	を	

第五目 下二段活

下二段活とは五十音圖中「えう」の二列すなはち下位の二
段にわたり「るれ」のそはりて活くものをいふ いま得る
受くるといふ二動詞につきて説き明かさんには たどへは

正しからざる後に仮すればなり 活語の奥義に通曉せる見識より名を命ぜは決して然らず たゞ他とひとしなみに活かぬのみにて尚より然る理由ありて整然たる一つの格に活くものと心得べし 一行一格もな行一格もな行一格も皆然り この格の類を變格とするときは「活しく活の類も變格といはざるを得ざるものをや

とやうにその語尾が一種の格に變化するものこれあり
たゞ「か」の一行のみこれに活けり すまはち左の圖式のごとし

ま	は	あ	た	さ	か	あ	あ
行	行	行	行	行	行	行	行
ま	は	な	た	さ	か	あ	あ
み	ひ	に	ち	し	き	い	い
む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	う
め	へ	ね	て	せ	け	え	え
も	ほ	の	と	そ	こ	お	お

世にこれを「行變格」といへるは不穩當の唱へなり

や	や	や	や
行	行	行	行
わ	ら	ら	ら
行	り	り	り
	ゐ	ゐ	ゐ
	げ	げ	げ
	ゑ	ゑ	ゑ
	を	を	を

第七目 さ行一格

「さ行一格とは五十音圖中「えいう」の三列すまはち「せしす」とやうに一種異様に語尾が變化し「るれ」のそはりて活くものをいふ 此は爲る大坐するといふ二動詞にのみ活く格と知るべし たどへは

爲る はせしすするすれ
大坐するはおはせおはしおはすおはする
おはすれ

とやうにその語尾が一種の格に變化するものこれあり

たゞと「さ」の一行のみこれに活けり すなはち左の圖式
のごとし

や	ま	は	な	た	さ	か	あ	列あ
行	行	行	行	行	行	行	行	列い
					<small>大爲</small>			列う
					と	き	い	列え
					す	く	う	列お
					れる	け	え	
					せ	こ	お	
					そ			
					ど			
					の			
					ほ			
					も			
					め			
					む			
					ひ			
					に			
					ぬ			
					ね			
					へ			
					ふ			
					ね			
					ち			
					つ			
					た			
					さ			
					か			
					あ			
					い			
					う			
					え			
					お			
					あ			
					い			
					う			
					え			
					お			

世にこれをな行變格といへるは不穩當の唱へなり

ら	ら	ら	ら	ら
行	り	る	れ	ろ
わ	わ	わ	わ	わ
行	ね	る	る	る

第八目 な行一格

な行一格とは五十音圖中「あいうえ」の四列すなはち「あにぬね」とやうよ一種異様に語尾が變化し「るれ」のそはりて活くものをいふ 此は去ぬる死ぬるといふ二動詞にのみ活く格と知るべし たどへは

去ぬる は いな いに いぬ いぬる いぬれ
 死ぬる は なな ねに ぬぬ ぬぬる ぬぬれ

とやうにその語尾が一種の格に變化するものこれあり たゞ「さ」の一行のみこれに活けり すなはち左の圖式

のりまじ

ら	や	ま	は	あ	た	さ	か	あ	列あ
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行
				死法					
ら	や	ま	は	あ	た	さ	か	あ	列あ
り	い	み	ひ	に	ち	と	き	い	列い
る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	列う
れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	列え
ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	列お

わ行 わ を

第二款 存在活基法

存在活基法とは存在動詞に属する語尾變化の格をいふ
格例の上につきこれを細別して

ら行一格

わ行上一

の二種とす

第一目 ら行一格

ら行一格とは五十音圖中「あいうえ」の四列すかほか四段
にわたり「らりるれ」とやうに語尾の變化するさまは作用
活基法の四段活格の活きさまながら「りる」の語尾に異様

の活性を具へて活くものをいふ いま在る 居るといふ 二動詞につきて説き明かさんに たとへば

在る は あり あり あり あり あり
居る は 在る 在る 在る 在る 在る

とやうにその語尾四段に係かりて一種に活く格これなり
たゞし「ら」の一行のみこれに活けり すかばち左の圖式のごとく

あ	あ	あ	あ	あ
い	い	い	い	い
う	う	う	う	う
え	え	え	え	え
お	お	お	お	お
あ	い	う	え	お
い	い	い	い	い
う	う	う	う	う
え	え	え	え	え
お	お	お	お	お

この開新式にはわ行上一段活の格を別にはなちて斯くものせるに「居る」といふ詞は存在性のものなるをもつてなり かいなての語學家語るなかれ

わ	ら	や	ま	は	な	た
わ	ら	や	ま	は	な	た
わ	ら	や	ま	は	な	た
わ	ら	や	ま	は	な	た
わ	ら	や	ま	は	な	た
わ	ら	や	ま	は	な	た
わ	ら	や	ま	は	な	た
わ	ら	や	ま	は	な	た
わ	ら	や	ま	は	な	た
わ	ら	や	ま	は	な	た

第二目 わ行上一

わ行上一とは五十音圖中「い」の一行すなはち上位の一段に「るれ」のそはりて活くものをいふ こは居るといふ 一動詞にのみ活く格を知るべし たとへば

居る^キ は か^カ かる^カ おれ^レ

とやうにその語尾が上位の一段に係かりて活く格これありたゞ「わ」の一行のみこれに活けりすなはち左の圖式のごとし

は ^ハ 行	な ^ナ 行	た ^タ 行	さ ^サ 行	か ^カ 行	あ ^ア 行	あ ^ア 列	い ^イ 列	う ^ウ 列	え ^エ 列	お ^オ 列
は	な	た	さ	か	あ	あ	い	う	え	お
ひ	に	ち	と	き	い	い	い	う	え	お
ふ	ぬ	つ	す	く	う	う	う	う	え	お
へ	ね	て	せ	け	え	え	え	え	え	お
ほ	の	と	そ	こ	お	お	お	お	お	お

ま ^マ 行	や ^ヤ 行	ら ^ラ 行	わ ^ワ 行	ま ^マ	み ^ミ	む ^ム	め ^メ	も ^モ
ま	や	ら	わ	ま	み	む	め	も
み	や	り	わ	み	み	む	め	も
む	い	る	わ	む	い	む	め	も
め	い	る	わ	め	い	む	め	も
も	え	ろ	わ	も	え	ろ	め	も
	よ	ろ	わ		よ	ろ		
	よ	ろ	わ		よ	ろ		

第三款 形状活基法

形状活基法とは形状動詞に屬する語尾變化の格をいふ格例の上につきこれを細別して

- く^ク活
- とく^{トク}活
- けく^{ケク}活
- とけく^{トケク}活

の四種とす

第一目 く活

く活とは五十音圖中「いうえ」の三列すなはち「か行」「きくけ」の三音に「さ行」「し」の一音まじりて一種異様に語尾が變化し一種の格に活くものをいふ いま高く寒くといふ二動詞につきて説き明かさんにはたとへば

高く	は	たかし	たかき	たかく	たかけれ
寒く	は	さむし	さむき	さむく	さむけれ

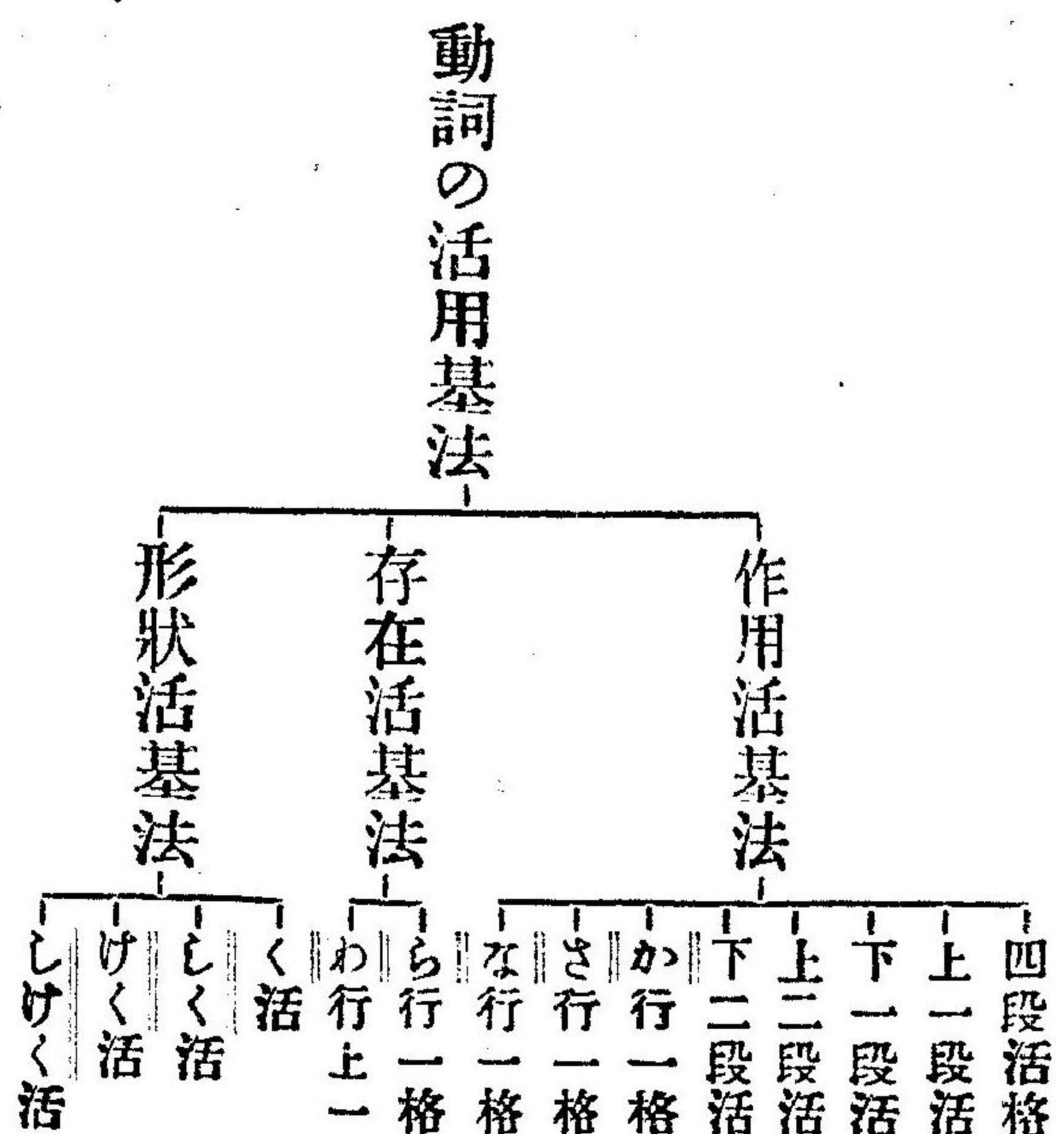
とやうにその語尾が一種の格に變化するものこれなり たゞし「かさ」の二行にわたりて活けり すなはち左の圖式のごとし なほよく活けく活とけく活の三種の活格もまたこれにあひ同じ ゆゑに圖式をさらに贅せず 説き

明かしも答す

あ行	あ	い	う	え	お
か行	か	き	く	け	こ
さ行	さ	し	す	せ	そ
た行	た	ち	つ	て	と
な行	な	に	ぬ	ね	の
は行	は	ひ	ふ	へ	ほ
ま行	ま	み	む	め	も
や行	や	い	ゆ	え	よ
ら行	ら	り	る	れ	ろ

わ行 わ を

上に講述せる動詞の活用基法格例の類別を系統上表明し
もつて一目瞭然たらしめ記憶の便に供ふる左のごとし



前章において既に動詞の活用基法における格例類別を詳
かよと動詞活用法の基礎をほゞ會得せしめられたればなは一
歩を進めて動詞の時格に説き及ぼしてん

第九節 動詞の時格

動詞の時格とは動詞は語尾の變化によりて「現在過去未
來」の時を言ひ表はす特性の格をいふ

そもく我が日本帝國の語法中動詞活用の語尾の變化は
作用動詞存在動詞形状動詞共に悉く皆五十音圖ある音位
の系統に準則して規則正しくその語尾を數様に變化し一
詞にしてよく時の機轉を辨ずるの樞軸をかし後靈辭とあ
ひ須ちて活語妙用の意味をつくすを豫想するに足るべき
基礎をなせり しかしてその語尾の變化はそのあひ關し

從來語學家なべて動詞の
時の「過現未」は發音口形
の機轉運營の變化に起因
するの原理與義を證明せ
しもの皆て在來世にあり
ふれたる語學書に及び近
時新刊の文典類には一ツ
も有ること無し 杜撰と
しやうじ 雅しやうじ
この發音原理の啓蒙は靈
臣が嚆矢にて既し明治十
五年一月十八日の出版
際かる日本文法摘要同じ
く廿三年四月廿日の出版
に係かる國文語學講義録
にも詳密に論じ置きたり

きは本編の附録に因
解をもて周到精密に論究
せり

あひ須つべき音の母韻發象の運營に基づく口の開合よ起
因し天性自然の妙機よ出づるものと心得へし その理由
何とされば母音「あいうえお」の五音中

あ音

は始めて齒を放ち口を開く息氣の運營に因る發音の最初
に際しその意未然の性質あるをもつてこのあ列の系位す
なはち第一音の横列よ係かる語尾の轉用はすべて未來の
時を示す格とあるなり またその

う音

は齒を閉ち口を半ば開きたる固有自然の口形よ發する息
氣の運營よ因れる音かるをもつてこのう音の系位すなは
ち第三音の横列に係かる語尾の轉用はすべて現在の時を

示す格となるなり またその

え音

は齒をすこと放ち口角を外側にひきて發する息氣の運營
よ因れる音なればほとんど言ひ居ゑて治定するよ近き性
質なるをもつてこのえ音の系位すなはち第四音の横列に
係かる語尾の轉用はすべて全過去または半過去の時を示
す格とあるなり またその

い音

は齒を閉ち口角を外側よひきて發する息氣の運營よ因れ
る音にてつまりあ音に十分開きと口の反動作用になれる
ものとす されば未來の時を示すあ音發象の反對なるを
もつてこのい音の系位すなはち第二音の横列に係かる語

尾の轉用はすべて全過去の時を示す格とあるなり。こは天則自然の妙用にして實に我が日本帝國語法は正に天造に成りて人意の外より出でたりといふべし。はた人種の由來を証明するに足り本邦固有のものたるを窺ふに足れり。

(この動詞活用基法に於ける語尾の變化によりて時の過現未を辨するの妙用は全く發音口形の據轉引起因するの學理は予が發聲細則よりなるなり。こはかつて明治廿二年十一月一日の出版に際する日本語學發家にも既に説き示せるがごとし。なほ附録の音聲門の條に詳密に圖解をもつて説明せり。參照して會得せよ。)

さて動詞語尾の變化によりて時の現在過去未來を言ひわかつ状態の差異辨別をいま初學のために圖解をもつて懇切に説き示さんに。たとへば自宅より學校へ「往かん」とするに

か行 ゆか ゆき ゆく ゆけ

とやうに語尾の轉ずる中に

ゆかん

はすあはち^ゆの辭を添ふるときは俗言の「ユコウ」と言ふことにて脚はいまだ室内を一步も踏み出ださずしてたゞ意思にのみ「いそゆこう」と思ひを發こしたる未然の時を指すあり。すあはちこれを

未來格

といふ 圖中「甲」のごとし また

ゆく

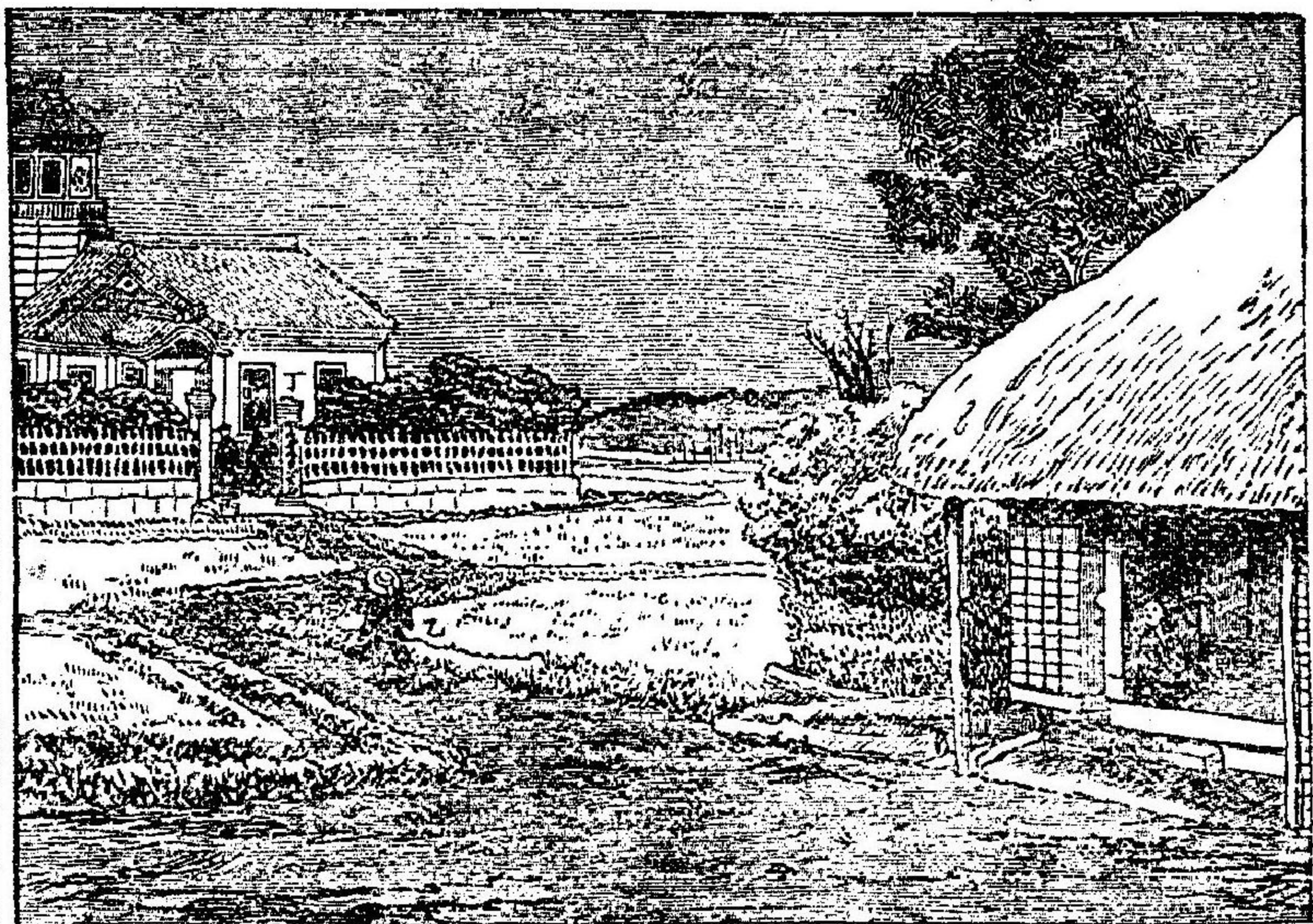
は俗言にいふもすあはち同じことにて歩を運び脚すでに自宅の室内を出で、學校の圍内に入るまでの途中歩を進むるの間を指すあり。すあはちこれを

現在格

語法學を初學生に教へ導くに斯く圖解をもて開發的に學理を講明せしもの
在來の語學書新刊の文典書類にはかつて世に在るを見ず
これ實臣が啓發に係り本會編輯録をもて嚆矢とす
今より後語學書に圖解せる開發的のもの世に出づるあらば全く本會の意匠ならん
似せるものと認定すべし
もし然るまればするあらばその理由を公言してたすべし

とすふ 圖中「こ」のこもこ

自宅ヨリ
學校へ往
ク脚ノ連
ビノ現象
ニ就キテ
動詞ノ時
ヲ辨明ス



また

ゆけ

はすなはち「は」の辭を添ふるときは俗言の「ユキタレバ」と言ふことにて學校に往き着きたるはかりの際を指すなり
すなはちこれを
半過去格

といふ 圖中「丙」のごとし また

ゆき

はすなはち「つる」の辭を添ふるときは俗言の「ユイタ」また「イツタ」と言ふことにて歩を止め脚すにて學校の圍内に定まりて坐に着きたる後を指すなり
すなはちこれを
過去格

といふ 圖中「丁」のごとし またこれを朝起くることにも夜臥すことにも物を見ることにも事を聞くことにも言ひ轉じてその時の「過現未」を辨するの理はみなすべて同規一轍にしてすことも變異なきものと心得べし もと斯くのごとく動詞の活用上にその語尾を變化してもつて時の機轉を辨すべき基礎をなすにあらずはいかかある靈辭が語尾に添はるもいかでかこれを百般の活事活物に應用してよくその意味を盡すことを得べき

これけなし我が帝國日本語法の外國語法に對比して獨り坤輿の上に高く冠絶たるどころなり 多年甕臣が身を死地に投げうちて國体の獨立と人種の由來とを証明せんがため飽くまで同志國体家とあひはかり國のため

道のために國文語學の蒙を啓き語法文則を發揮せんとする一大事業に苦心努力して片時も措かざるところたり
さてこの動詞の時格と上の動詞の活用基法とを合はせてこれを五十音圖に表明しもつて一目瞭々その法規を會得せしむ

- 列あ
- 列い
- 列う
- 列え
- 列お

(第一音)(第二音)(第三音)(第四音)(第五音)
「未來格」「過去格」「現在格」
半 異字 過去格

- あ行
- あ
- い
- う「異字二上」
- え「れる」
- お